青鞜

五月號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第二巻第五號目次

桃色の灯……三ケ島よし子……一

あきらめし戀……原田琴子……四

習作の二……杉本正生……九

ゐれむり……三島きぬ……二四

赤い扉の家より……尾竹紅吉……三三

肖像畫……ホ　オ……五四

雨の日……田澤操……五九

日記の斷片……岩野清……六五

圓窓より……らいてう……七六

松の花……白雨……八〇

かたり……岡田八千代……八三

叔父ワーニャ……瀬沼夏葉譯……一〇一

編輯室より……一一三

表紙繪……石崎春五

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

四十五年五月一日
第二卷 第五號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜研究會

社員外の婦人にも聽講を許します。（事務所の方へ御申込下さい）

本會への出席者は極めて眞面目な熱心なものでなくてはならぬ。

本會は決して面白いものではない。

諸嬢を喜ばせむが爲めに開くものではない。だから豫め御覺悟を願ひます。

モーパッサンの短篇　（金曜日）　生田長江氏

ダンテの神曲　（火曜日）　阿部次郎氏

毎週火、金の二回、午後三時より五時迄

會場は本鄕區駒込蓬萊町萬年山（勝林寺）

會費一ヶ月金五拾錢

なほ委しくは事務所の方へ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

桃色の灯

あけがたの竹のそよぎをわづかにも春めく胸のささなみと聞く

夢を待つひろき心の姿かな花若草に土筆交る野

黄も白もわづらはしきにあらねども春はゆかりを問はず尊ぶ

十年の君が恨を負ふと聞きそぞろうれしき日にぞ別るる

ここかしこ花散りまじる雨にだに似るよしもなきわが涙かな

誇るべきわが世ならねど身にあまる榮華と思ひ片戀をする

とりなほし近づきしかとよろこびぬ日日に低しと知り

し聲をも
山かげの暗き夜道を悲みぬ戀の及ばぬわが心とも
なりゆきに從ふといふはしたなきはじめの我にかへらんとする
生きなんなど思ふによりて死にゆきし心はすべて蟲なりしかな
なほ多く醜きものを持てるゆゑたのしみありぬ明日の心に
はかなくも遠き夕日をよこいとにしばらく織りぬ春雨の機
咲くをこそ惜め牡丹の蕾見ゆ肉いろをもつ軟玉のごと
殘りゐぬ古き墳墓のほとりより出てし埴輪の心地しながら
去(い)ぬる時示したまひし美しき死あり數(す)段(だん)のきざはしの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

上

灰色の死も桃色の灯もひとし上に見る時明日に置く時

この山は春きて悲し木立みな涙の如き青き芽を吹く

地を這ひてゆかまほしげにつと低く飛ぶたそがれの名も知らぬ鳥

やがて今君きたるてふさきぶれにさからひをれば春風ぞ吹く

君ははや出でぬ木の芽と春雨とけぶりとざせどかひなしや門

――三ケ島葭子――

あきらめし戀

わが戀に人のねたみのかかれるも花のほとりの水に似てよし

わが袖の涙にぬれて漸くに少女のごとき心地するかな

おもしろく魔法使の手のよりて咲きたるごとき山ざくら花

さし櫛を折るよりやすく親たちのいさむるままにあきらめし戀

よしあしを問はず春にはなるるごとものの解けたり少女心に

足とめて明日をはかれるくらがりに印ともなく折りしコスモス

戀といふことのはづみにふと得たる命と思ふ我とし思

ふ

えにしなどありもあらずもこの戀はその外にしてわがたくむこと

大なる諦め來る果てのごと涙の中に浮き出てし戀

ピアノ彈くなほなぐさますわれをしもピアノの如く人の彈かぬか

生けるをも夢かあらぬかみづからを柱になげて漸くに知る

何やらにたぶらかされてあるごとし風ばかり吹く夕月夜かな

少女子のひとり住めればあらし來る前の樣にも人のさわげる

一枚の瓦の落ちてわれたるもふとかなしけれ我が家なれば

世はやすし日に千度に泣く君も生くかたはむすめのわれさへも生く

旅をして

草鞋はくいとあぢきなき旅さへもわれはするかな春のやよひに

かなしくもいたましきかな少女にてざんげのごとく巡禮をする

少女子が巡禮に立つあけがたの白く冷きうすあかりかな

寺入りをする日のごとく涙おつ白きはばきの紐を結べば

わが姿忍びて泣かん人ひとりつくらて來たるくちをしき旅。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

砂ぼこり上れる寺のきざはしに黒髪のする祈りごとかな

毒を食ふわが身の果ての心地して握飯(むすび)二つの晝支度する

巡禮の少女の袖をぬらす雨人の涙も少し交らん

黒髪はまだながきかと手をやりぬ巡禮ながら花の匂へば

走り出て人のさわぐもあぢきなし戀にもあらで忍ぶ姿を

みづからにあやしくなりぬ死ぬところえらびまどへる濱づたいかと

二三里も松原つづくあぢきなさ親兄弟がつくる世のごと

人形の泥の足にも劣るべしぬかるみをゆく地の底をゆ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

くしらとりとなりてみそらにかへるごと流れてありく巡禮となる

狂ふ子が狂へる馬にむちうちてまよひ出でたる旅なるごとし

――原田琴子――

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

習作の二

妾は戀の悼ましい胸を抱へ乍ら、二條高倉なる吉村の家を訪ねたのである。過去になつて行く人の戀しい瞳を脳に描き、貰つた手紙の一行ほどを口の中に繰り返し乍ら、悶えに堪へられぬ心の遣り處を友の吉村に慰めて貰ふと思ふのであつた。

微かな洋樂の音が、門前の植え込みにまで洩れて聞えた。已う七時をすぎてゐる春の宵暗は、家の内から洩れる瓦斯の光りに白壁を白く光らせ、夫れほどもあらぬ木立を半ば照らせるため、奥ぶかくあまりに凄く妾の心を怖えさせる。妾は案内に連れられ、房を通ると、廊下の木の香の青い匂が、刺され易い妾の胸をついと衝く。

吉村は、其生々しい顔を直ぐ見せて呉れていつもの快よい語を撰んでさも嬉しさうにして見せた。ピアノとセロとを合してゐた處だつたと言つた、妾は直ぐ散歩して欲しいと嘆願したので、氣さくな吉村は無雑作に頷いて間をも待たせず、衣服を着替へて來て呉れたのであつた。

いつも乍ら、水々しい匂のする黒い髪を豊かに銀杏返しに結び、今夜は白つぽい博多か何かの縞の目立つ羽織に、琉球の細かな綿入れを着て、白いブローチーさへ光らせてゐた。

外へ出ると、晝は極蒸し熱かつた大地の、悉かり冷えきられて埃り立たぬが、草履の底から冷えの入り込むと思はるるほど寒い。

今夜はふと、戀の心苦しさを打明けて、吉村の氣丈な心を呟かせて見やうといふ様な幽かな希みさへ有つてゐたが、でもいつも乍らの吉村の明晰りとした、感情に捕へられぬ、男性に見るやうな健全な表情に富む顔を見るといふと、思はず此方にも對抗的な強い意氣地を張らざるを得なくなつたのである。

『來月は本田日生さんが來ますよ。』

相變らず、熱心に吉村は日蓮宗を研究してゐるのであつた。

『よく倦みませんね。』

妾は恁う言ひ度かつたが止した。餘りに正直な此人を惱まし度くはなかつたからだ。

線路の埋め立てに、甚どく道の荒れてゐるが嫌さに、三條通りを歩いて、ふと先斗町を通つて見やうと何らからともなく言ひ出したのであつた。

黄色い灯の並ぶ此町がしんみりとした情趣味を誘のかすやうて、妾は何處よりも京都で第一好きな町である。

實世間には極、無交渉であつた吉村の半生が、憧憬的な文藝上の趣味に次第に深く這入つて行くに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

従ひ、只披げらるるままに、何でもありつかふといふ、烈しい欲求からかうした遊廓のやうなものにさへ、妙に興味をもつて観やうとする。

只、歩いてゐるだけでさへ、縁遠い中の空氣が幾重の幕の外から肉薄して來るやうにさへ思へる。細く、長く續く、此町のしみじみしい韻きが、黄色にまたたくかけ行燈の灯と共に、明かるい理知の夜の町から、ひそめき忍んで來る人にさゝめき倚るやうに、妾は言ふに言へぬ一種の底さびしいとも、なつかしいとも、遣る瀬ない感興をさへ誘そらるるのである。

いつか二人は、異性の戀を味はふ樣な形ちで、握り行く手を、緊く緊く締めるのであつた。

處々の二階に彈く三味線が、前にきこえ、遠く後ろに消えて行くさへ、古い世の物語りめいて妙にゆつとりとした情趣を惹く。古いといへば、小稻半兵衛の一節が、澁い調まはりに、微かに板壁越しに洩れて來る。

仄明るい其軒燈の下を大きな舞子の帶が、夢のやうに斷れ斷れに消えて行く。しつとりと水を打つた潤つた土の上を、音もなく歩いて行く意氣な男の忍び行きさへ、耽醉的な微笑えみを味はせる。油ぎつた、丈夫さうな、細長い提灯に高等アイスクリムと長くかいて、特意の錆び込んだ聲で叫びあるく姿さへ、一寸外の町では見られない珍らしさと不思議を强ゐられる。

あまりに女に馴れきつた男の弛んだ身體に、倚りそうやうにして從いて行く若い女の白く塗つた顏、思ひきつた曲線の豊たかさを見せる縮緬の肩、鼠にかつた着物の地色さへ、仄かな暗の中に掻き消え

て、さうした色さへ京都式の色彩の沈靜とさへ言つて見度い。

――思ひ大津の柴屋町、憂きが中にも樂しみは、――

何だか古い感じが、寧ろ痛切に涙をさへ催させる。

座敷に急いて行く妓(そんな)が、歌鏽のついた聲で弛(ゆ)るい京都言葉で話し乍ら行くさへ堪らなく妖艶に見えてなつかしい。

古い大津繪ぶしを無意氣に唄つて、地をさせてゐる商人らしい客もある。さうしたのも隔つた世の物談りを見るやうて、妙に妾しには心を誘そられるのであつた。

――内部の餘りに汚れた血(ち)の姿(すがた)を見ず――花やかな色彩の强烈な影に秘そむ、哀れに寥しい事實にもありつかず――恁ういふ風な要求を以て妾共は、妾共に緣遠い恁うした遊廓などといふものをも、夢のやうな物語りを見る氣分て、憧がれ、慕はれ、觀るのでなくて覗き込んでゐたいやうな心持ちてゐるのである。

先斗町をも盡きて、四條へは出ずに、うれし野、といふ精肉屋の前を折れて橋を渡り、桐の家の前を通つて祇園茶屋の方へ出た。

『些と倚つて見ませう。』

二人は讓り合ひ乍ら二階へ上ると、騷々しい音をたてて、下りて來る學生達に逢つた。

『妾しはあゝ言ふ學生が大好きなんです。』

吉村の背に隱れるやうにして房へ這入つた。同じ道を歩む、同じ年頃の男性といふ感情が妙に反感を抱きたくなる上に、先方の方て妾共に同情のなささうな點が限りなく淋しいからである。肉體の發育の激しさを示すやうな其形ちが怖ろしい。

『何を召し上つて。』

『何でも頂きます。』

『妾も何でも。』

『ぢや四季を並べませう。』

『ぢや然うしませう。――時雨を厭ふ唐傘の――地歌(ちうた)もても好いものてすね。』

『雪、なんかしんみりとした情趣が漲つて野暮つたい騷々しい江戸人ては解らないやうな處がありますね。さういへば片山派の舞もあまりに骨を張りすぎてますのね。』

『――夜半の鐘――』

さう吉村は言つて唄ふ時のやうな眼を瞑つて、

『神秘てすのね。』

『ほんたうにね、あまりに淋しいといふやうな處が却つて今の京都の氣分に應(あ)つてるやうてすね。』

然うした無意味な話が、愁しい失戀の餘韻さえも抹して呉れるやうて、妾は努めてかうした埒もない話が爲度かつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

然しかうした話は、肝心の吉村の方では淡い水を飲むやうで、會合の悔さへも思はせたやうであった。

吉村は又、何ういふ風から自分が中心になる話を爲出さうか、あまりに快よげに微笑みつゞける姿には、いつもいつも同じ氣焔ばかりを浸せかけて濟まないやうな處もある、かう考へ深い同情に勝つた彼女の脳は思ひなやんだ、夫れでも極、遠まわしに、ヒャデルヒャの友人からは手紙の返事が來たとか、大陸性の氣候に、果して堪へるだらふかとか、妾を促すやうな短かな言葉を撰んできかせた。――戀を失つて、かうした哀愁が、吉村と同じ船の人となる事を考へさせもし、異國の死をさえ思はしめた。――老いた悲しい母を遺して、海の外の光りに打たれる。痛快な中に、綿綿とした憾みも混る。

『何うしても今年中に決行しますよ。』

旅行劵の口實は音樂研究として、まだ其上に過半、實業的な他人に語れぬ深い希望がある。恁う吉村は言ふのである。――文學、も興があるけれど、もつと、もつと生產的なものに存外趣味のあるものがあるから、寧ろ氣樂な研究を、西洋の月日に委ねたなら、誰人に遠慮の要らぬ自由な仕事が出來やうに、死さへ餘りに易い身體を、さう究屈に考へんでもよからふ――恁う吉村は熱心に、空想を擴げるまゝに涙さへ浮かばせて説く。

意思、といへば恐ろしく健固な、思考に堪へ得る女から見れば、解放された境遇にあり乍ら、何年

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

經つても同じ形で、いじいじ爲てゐる妾が、惨めに拙らなく見えもするであらう。感情に動き、感情に亡びて行く妾の姿が堪へがたくなさけないのであらふ。救つても遣り度い心地がされるのであらふ。

けれど夫れは何うする事も能きない、いたい氣な感情に亡びて行くのが、有つて生れた妾の運命の自然のやうに思はれ、生じ吉村のやうな女から享ける氣分が、ふと妾しを荒ませはせぬだらふかといふやうな怖れさへもち添へるのであつた。でも、實世間の女、新時代の女の事業、ときけば慕はしいなつかしい。恁うした取りとめのない。大まかな趣味に此方の岸から彼方の岸へ移り漾ようて行くやうな妾の氣分は、海の外なる廣々しい天地に抱かれ、自由な解放された新らしい空氣を吸ふといふも、たとしえなく勇まれて考へしめるのであつた。

何に固く有りつかうといふ節操もなく、眼に觸るゝものが珍らしく、敢て新らしくない事にまで思はず手を出して見度くなるやうな浮薄な輕跳な妾の性情は、吉村に促がされるまでもなく、已う好い加減に、文學的な事に飽き飽き爲出してゐた時である。夫ればかりか、失戀の深い痛手は、痛切な文字を讀むにさへ辛らく、寧ろ、無神經な人のやうに、物質の奴隷となつた打算の月日を送り、全く世間にも人にも囚はれない自由な隱れ家が望まれてならなかつたのであつた。

吉村は粋の溢れる袖口から太い腕を見せて額の邊りを悩ましげに支へ乍ら、

『妾しは失張り氣が弱いかも知れないのね、解放されるな何でもないのだけれどもさう心強く父の前

へ出られないのです。其點はあなたの我儘な感情的な性格が羨ましい。』
異性のやうな語調を見せて、低い聲で物語たる。妾は惹き入れられるやうな心持を感じて、

『自分の爲度い事となると、何れ丈け笑はれても構はず、何れ丈け翻弄されても構はないといふ様な極、愚かな處がありますよ。妾は、ですけれどね、夫れがみんな有益な事になつてゐない、みな徒勞なのです。……』

『さあ、徒勞でせうけれどね、あなたのは何う言つて好いか、長續きしないのでせう。』

『ええ、さうよ、長續きしないのです。ですから徒勞になつちやう。』

妾は淋しくかう俯れて、眞赤な火を弄り初めた。縄手邊りから聞えて來るしんみりとした柳の流しが、穏やかな鴨東の夜をさゝさびやかに吹き流れるのであつた。

『異性に生れて來ればよかつた……』

獨りごちして、暗い紫色の半襟を搔き合せて、つくづく思ふらしい苦しい吐息をそつと吐くのである。

『妾しはさうは思はない。夫れはあんまり誇大し過ぎて考へるのですわねえ。』

妾はかうした吉村の夫れほど強く女を離れて行かうとする氣分が解らず、寧ろ幼稚な夢のやうに考へられてならなかつた。

よく吉村の口癖の結婚はつまらない。夫れが妾には何うしても解されぬ、さうした淋しい孤獨を欲

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

する裏面には、何か慘ましい影の秘んでゐるのではなからふかとさへ疑ひはし度けれど、戀の痛みに破れた女には、已う取返しのつかぬ自棄的な、敗滅的な氣分が漲つてゐて、裁り立てたやうな生々しい力(ちから)も憶れも焰ゆるやうな生の熱情も、慘憺として影を秘めて了ふのが普通である。

吉村には、まだ實世間の波浪にも捲かれず壓迫の動かしい難い不自由さも感じず、まだ異性の嚴威にさへも觸れた事のない、極生れたまゝの直なる性情を、豐かな生活の爲めに悠然と伸して行つたやうな、妾等から見れば羨望に堪へない尙とい部分を有ち備へてゐるのである。

妾らから見れば、驚くほど架空な事までも極、何氣なくやつて退けられるやうに見えて通常な世間の女が吉村には生き甲斐もないほどに馬鹿々々しく見えも爲るのだらふ。然しから吉村を危ぶむのは、妾の弱い、哀しい經驗が爲るのであつて、果して何れほどの成功と理想が摑めるか、危險な事は口には爲るが、絕えず世間と沒交涉にならぬやうに、古い人の作つた直な道は枉げぬやうと、女には珍らしいほど忍堪を備えてゐる吉村の事だから、或は妾らの夢にも見ぬほどの成功を遂げるやら解つたものではない。

夫れに妾らの樣な、淺い疑問をも有たず、寧ろ研究的興味の有てる性は、日蓮宗のやうなものまで近來やつてゐるといふ。一面にはさうした氣分が甚だ輕薄を語るやうではあるが、小さい自我を信賴した懷疑な妾らから見れば、寧ろ安全に、眞卒に、廣い洋々とした世界に隨從する事も能き、之ならば新時代を呪ふ嚴格の人より容れられも爲るやうに思へて、又となく吉村の道が羨ましい。

17
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『縁談はね、母の系類なのです。實に煩さいほど進めるのです。ですけれど何うしても斷りますよ。……結婚の爲めに費す丈けの勞力を他に拂へばなあに、何でもない事ですものねえ。』

『さうでせうか知ら。……妾には文學が中毒したんですね。……妾には文學のやうな學究的なものは柄に逢はなかつたんですね。生じ好きだつたのが身を誤まつたのだわ……』

お互に、語はふとするだけを聞いて貰ふとして、勝手々々な事ばかりを言つた。

ふと一時に込合た客は、悉かり席を塞さげられて唐紙まで衣服を擦らせて廊下に立ち並ぶのである。

吉村は嫌な顔をして席を立つと、

『先方に立つてゐる老人の人があるでせう、父の友達なんですよ。此方から挨拶すると好けれど、父の前で話しされると又誤解されますからね。ぢや出ませう。』

恁う、吉村は其人に隱れるやうにして階段を下りた。

然うした吉村の態度さへ堪らなく氣の毒な氣がしたのである。

二人は又、氣紛れものが爲るやうに、圓山の方へと歩を向けた。

夜櫻はまだまだ早いけれど、櫓の中の小櫻は少なからず花をつけてゐた。

靜寂な夜韻を破るやうな智恩院の鐘が、二人の頭上に驚かせるやうに鳴り出した。火けた跡の圓山は、何時ながら只無止みにだた廣くなつただけて其上平の家の極京都式な低く長い屋根と替へて拙ま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らないレストラントのやうな田舎めいたものを建てたため、殊に其位地がみじめなほど傍に倚りすぎて、十年以前の、都らしいのびやかな調子があとかたもなくなつて了つた。

平の家は、むかし二家に離れてゐて、北と南とは客すじもいくらか違つてゐた。お上りのお客なら必ず名物として玆の料理を喰べたものであつた。

仲居はみな若い女を選び、揃への帯、揃への着物、赤い前かけを長く垂れて、叫べば返辭をのびやかに悠くりとした細い聲で答へたものだつた。

竹の皮包みのやうな小さな島田に、白い丈け長をかけてゐた小婢の頭が、妙に妾には今でも見たいやうな氣がする。

『あなたは平の家へ行つた事があつて、昔しの事だけれど。』

といふと、

『さあ、覺えてないやうね。行つたでせう。』

恁う謂ひ乍ら、松の影の黑い芝生の上を、音もなくぶらぶら歩き乍ら、自分一人の空想に耽つて恁うした妾の底かなしい氣分さへちつとも通じてゐるのではない。

靑くまたたく世阿彌の櫻閣が、ドラマの景物でも見てゐるやうで、妙に奇異に感じられるのであつた。晝は、極目立つ瓢の幕も、仄暗い灯の中に、赤と白との見別さへつかない。已う更け渡る夜を知らせるほどに、夜廻の拍し木が、森々たる靜脈を破つてひゞく。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

妾は此音をきき乍ら、遠い昔しに返るやうな氣さへする。平の家の樓上に、あの音をきき乍ら、しめやかな地うたの爪彈きを小兒心にも無心にきき惚れて、いつか老婆の膝の上にうつらうつらと眠つた事さへある。遊冶郎の資格も氣分も充分に備へた兄に隨つて、妾はよく平の家から送られる俥で、大津の新蝶といふ遊廓へさへ連れられた事を思ひ出す。妹を青樓の二階に寢かせる氣まぐれな兄、妾の育ぐくまれた幼い時の周圍は、誠に一種の世間にかけ離れた空氣で充ちてゐたに違いない。

妾はさうした事さへしみじみ我身を顧みて、亡兄の血が、何處か恁う知らない感じない身の内に流通してゐるとさへ思はずにはゐられないのである。

迚も妾しは、吉村のやうに、意思を粧ふ女とはなれない、伴つて強く生きるより、そびる形ちを目前に見つめ乍ら、弱く哀しく、ありのままに教へに背いて暮した方が妾として有つて生れた自然ぢやないか知ら。とさへ、吉村の片かげに倚りそつて歩き乍ら、うつらうつらとして考へ出した。

南の空は、中京の花々しい灯が照り上ぼり、闇のやうな色をして黒い松の梢の上を彩り渡たす。夕映えのあまりに明るい色などが妙に幼稚くさう見える眼には、恁うした空の色は淡々としてゐて、名狀しがたい品位を帶びて見えるのである。

「さう思へば、京都を去るのも忍びないやうな處もあるわね。」

恁う妾しは吉村に言ふと、

「何處かさう思つてね。だけど、そんな淋しい趣味に囚はれてはゐられない。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

氣の毒さうに妾に言つて、ついと噤んで了つた。
うすら寒い風さへ妙に身をめぐる。
『歸りませうか。』
と吉村に言ふと、
『ええ。でも遊んでもよう御座んす。家ぢやぢつちら考へる事も出來ないのよ。用事が多い處へ、父のお相手の話しが長くなつてね。』
『つまらないのね。さうですか。』
『ですからあなたと恁うして歩いてる内に、不思議な程、心に準備が付いて行くのよ。』
『さう。』
『ですから、おつき合ひして頂くやうだ。』
『でも四條の方へ出て見ませうよ。』
『眞葛が原なんかへ行き度い。』
『さう。淋しいわね。』
何ちらともつかずに二人は無止みとぶらぶら歩いた。
明るい電燈の下を通る時、明晰に浮び出した二人の影坊師が、銀杏返しを妙に盛りよつたやうになつてゐるので、妾は思はず胸を冷やめられた。吉村の方を見ると、驚くほど水ぎわだつて髮の形ちが美し

く見える。妾はよく光線によつて變る自分の顏などが見るに忍びぬほどなさけなく思ふ事さへある。然うした事すら、全く知らない樣に、吉村はさも快濶に話してゐる。妾は好い加減な間投詞て紛らはし乍ら、ふと吉村に女優の話しをして見やうかと心に考へた。

其時、丁度派出署の前に、西洋種の犬が小急しげに通つて行く、其白い毛が、中から射す電光が眞赤な硝子を通してあかあかと道に投げてゐるものだから、全身桃色に染められて、黑い毛の處は佳い茶褐色さへ浴びてゐた。妾共も、手も頸も、其光りに染められ乍ら其處を通つた。

『あなたのやうに、夫れ丈け音樂の素養があれば女優になつて御覧なさいな、新らしい事が發見出來るてせうよ。』

と妾は濁つた小さい池の水を見つめ乍らいふと、

『まつぴら、死んでも嫌てす。』

此強ゐて押へつけた言葉が妾を笑はせた。

『可憐さうに、妾は其處迄墮落してゐない。』

二人は思はず淋しく笑ひ合つた。

『少なくとも、妾は異性の玩弄などになり度くはない、又玩弄し度くもないのですよ。只すこやかな友達てあつたら好いてせう。』

眞からの聲を出して、妾にさも抵抗するやうに力を強めて言ふのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

[illegible]とするやうな心の激動さへ、妾には厭じられたけれど、妾は只もう靜かに默してゐた。つまらない反抗が、妾しには止みがたくなさけないからであつた。

充分、受け入れ度い先方の氣分も、反抗の爲めに其鋒先きを挫るやうな怖れに對する用意が、妾しには考へられてならぬのであつた。

二人は大谷道の石疊みの、伸べたやうな長く續く靜かな上を辿るやうに歩き乍ら南へと下つた。ふと護國寺の前から、大塚に行かうとする道の有樣さへ思はせるやうな下河原町を切り拔けて、東山病院の前を下りた。

「花見小路を通りますか。」

と妾の訊くのを、吉村は無言で指す方へ歩いて行く。

都踊りにでもなれば、何麼に騷がしくなる此邊りも、暗い沈鬱の底のやうに、三味一つ意氣にきこえて來ないのであつた。

妾は昨年だつたか此邊で、一軒佳い二階を見つけて、母と別れて晝間を其處で勉強しやうとしたが、よく近所で訊き合はして貰ふと、其處が縛奕などを打つ家だつたときいて、持ち運んだ机も其ままに打やつていた事を、ふと今思ひ浮べるのであつた。

■完■

——杉本正生——

ゐねむり

お定は暗い茶の間から、お淡の色紙などが張り付けてある壁ぎはへはつて稽古三味線を取り上げた。そして調子を合せながら、一寸氣取つてお歯黒の光つてゐる口元へ皮肉な微笑を浮しながら、

「市さんも、うまい者を食へ込んだものさつて言つたんだよ……手を取つてもなかなかねえ――」

「チョッ、戯、戯謔を仰つしやつちあ」

と眼の飛び出たやうな色の黒い市さんは、白髮頭を頸筋の處から手を廻して逆に二三度グル〳〵となで上げて面目なげに鮑の子のやうな形をして、日あたりの好い椽側へ動きもならず坐つたままである。が其のまま默つて仕舞ふとなんとなく男振りが下がるやうな氣がして、

「まあ一寸助けてやつたんです」

「そう云ふ人なら此方から、どうぞ助けさせて下さいつて頭を下げて行くんだらう」

「女のお師匠さんに逢つちあ……ぢつさひ」

「何がぢつさひ――どうしたの」

「ヒ………」

と市さんは煙草の脂のこびりつつひた前歯を出して笑つて仕舞つた。

「でも其の――」

と冷やかされないやうに、眞面目に出直して、

「活動の此れになる」

と言ひながら三味線を引く手付をして見せて、「と言ふんでげせう、だからそれ位なら――」

「家へお出なさいと其所で市さんが助けたんだらふ」

「まあそう云ふ寸法なんて」

市さんは苦しそうに斯ふ云ふ。

「兎に角やり方が上手よ、」あくぬけがしてゐるからねえ――いくつなの」

「四十五六ですかな、ワッシもよくは知りませんが……」

「どうだい今のを出して一所になつちあ」

「戯謔を」

と言つたがどこやら嬉しそうなそぶりが見へた。

「なんしろ今のかかあは、御恩のある此方へも御無沙汰するやうなろくでなしですからな、がその今のと私とは水と火でごく合性が悪いんです……」

お定は撥を輕く持ち直して、一チの絲を引いて襦袢の袖を引き出して、竿を二三度しごいた。

「お持ち遠様」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

前に先刻から、坐つてゐるお酌らしいのに一寸挨拶してなにがなし眼て笑つてゐた。
お稽古が始まると、市さんも立ち上つて三疊の長火鉢の置いてある部屋の柱の側へ、坐つた。

「今日あたりはさぞ向島邊は人出てせうねえ」

婆やは長火鉢の前へ、どうでもいゝといつた風な坐はり方をして時々脂てつかへる長煙管て煙草の煙を障子の方へ吹きかけて居た。

市さんは婆さんには快よい返事もしないて、「火の用心」と書いた古風な煙草入を腰から脫き取ると、又婆やが話しかけた。

「花は盛りてせうねえ――今が」

「さうてすなあ」

と言ひながら、市さんはふと婆やの顏を見た、と急に胸が惡くなるやうな氣がした。鼻の缺けたチヂムサイ婆さんてある。――

「これても此の白毛の眞黑な時分にあ隨分男を泣かしてやつたんだが……」

と婆やはドロンとした、徹の生へたやうな眼て無理に昔を思ひ出そうとするやうな眼付をして、時時若かつた頃の自慢話しをした。が鼻の缺けた、フガフガした話し振りて聞き手はもうチヤカして仕舞ひたくなるのてあつた。

「市さんお前さんだつて吉原に私が居た自分にあ隨分――なんしたもんだへ」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なぞと云ふと市さんは「其んな話しをされちやあ大變」と言つた風に

「まあさ昔は昔」

と大きく手を振つて仕舞ふのであつた。

婆やは重い腰を立たして茶棚から新しくお茶を入れた。

「婆さん――ワッシにかへ……なら澤山だ」

「美しいのなら是非なんだらふが……」

婆さんは嫌味を口の中で言つた。

「あの婆ばあは、あれでまだたつぷり色けがあるんだぜ――いつたいどんな氣持でゐるんだらふ」

「夕べ一寸眼が醒めた時、あの婆ばあが寐言をいつたぜ……市さん逃げたつてもう駄目だよ、なんて」

「クワバラクワバラ」

市さんは頸も手も一所にふつて

「昔しあ鼻が缺けちあゐなかつたからね……こふ島田かなんかて、馬鹿に意氣な女つぷりだつた」

男の師匠は市さんを見るときつとからかつた、て市さんは婆さんの顔を見るのが嫌なのかなんだか此頃あんまり顔出しをしなくなつた。

エヽ腹が立つやらにくひやァら、どうせう、こふしやうにくむとり鐘――

とお定が好い聲で吉原雀の終りに近い一節を稽古してやつてゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

稽古が濟むとお定は市さんの側へ煙草入を持つてやつて來た。

「ねえお師匠さん――誰からそんな話しがもれたんです……私しあちやんとけん當が付いてゐるが」

お定はキザミを丸めながら、

「なにしろ市さんは盛んなものさねえ……婆やちつと油を取つておやりよ」

「婆やさんだつて隨分大勢の男に罪を作つたんだからなあ――そのむくいよ、とあきらめて居るんだらふさ」

「何ね市さんからだつていふよ病氣をしよつたのは」

「何私しあ嫌はれものでしたからね」

「方々をしくじつて迄も通ひつめたのは、此處らに居ない人だつたねえ」

「男つてえものは皆薄情ものでサア」

「そう言へば市さん明日秋田さんでお花見があるんだが行かないかねえ」

「眞つ平ら」

「おやなぜ、レコが又來るよ」

「もうこり〱」

市さんは頭を振つて斯ふ言つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「サウサウ」
とお定は思ひ出し笑ひをして、
「婆や又去年見るやうに市さんと相乘りかなんかで――」
「女は年を取つちあだめですよ、はづかしいと云ふ情がなくなつちあ」
「オイ婆やお前はづかしひつていふ情て云ふもんがまだあるね」
婆やは腰をまげて便所から出て來てチョコチョコと手を洗つて袂て濡れ手を拭ひた。
「アレだもの」
と市さんは唾を庭へはいて見るに堪へないやうに顏をしかめた。
ガラッと格子の開く音がしてお弟子さんが二三人やつて來た。

いつの間にか婆やは、火鉢の向ふ側で居睡りを、してゐた。
窓から、花やかに射し入る光射を受けて、婆やの皮膚の染みが浮き出たやうに見られた。
「まあ眞つぴる間から」
お定は斯ふ言つて、チッと見入つた婆やの顏を見て妙に笑へなくなつた。
「こふなつちやぢつさひ」
と市さんは唇をためながら、煙管を取り直して、

「秋田さんの歸りに、男のお師匠さんが、嫌がる奴を久し振りて婆さんと市さんと昔の夢をくり返へせなんて、ヤレヤレてとうとう婆さんと車へ相乘りとなつたてせう、私つしも夜だからまあ我慢したやうなもんてすがね、だつて昔の腰も骨だつた今の腰たあ第一抱き心がちがいまさあね、て私しあつくづく溜息が出ましたね、おまけにコクリコクリやらかすんでせふ、嫌やても、おさへてやらなければならないし時々フガフガ寢事は言ふしア、と思ひました是れが昔大騷ぎやつた死んでまでもと思つた女なんだからなあ」

「少しあ可愛がつておやりよ今だつて」

「萬圓貰つたつて嫌やてすね」

そこへ男の師匠が朝湯から、歸へつて來た。

女の師匠は入れかはりに稽古に立つた。

「好いお天氣てすね」

「ブラブラ出かけやうぢやないか」

「贊成」

市さんが高ひ聲を出した。

「貴郎お稽古は」

「お晝迄には歸るよ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「私一人ぢあ……いつも其んな事を言つて」

市さんはもふ煙草入を腰にはさんで羽織の衿を一寸直しながら立ち上つた。

「大丈夫」

と市さんは笑ひながら、お定に挨拶してサッサと外へ出た、が男の師匠がなかなか出て來ないので、

「女のお師匠さん大丈夫てさあね」

と言つて又上がつて來た。

「市さんでないと私も安心だがね」

お定は不機嫌な顔をしてゐた。

「まだ居殘りをしてやあがる」

市さんは奥をのぞいてなにがなし口惜しそうに斯ふ言つた。

■完■

――三島絹――

赤い扉の家より

前略

九日の朝、歸京しました。

露西亞の人間が、いくら遠い歡樂の國に有つても、又異國を慕つて放徨してゐても、どうしてもあの宏大な尊嚴な寺院の鐘を慕つて歸へつて來ると云ふぢや有りません？

それですその鐘の音です。若い私達、幼い私共をはぐくむ樣な、その響きを、私は、何處に行つても忘れる事が出來なかつた。

東京『お江戸』は私にとつては、露西亞の寺院の鐘でした。私は、朝と、晩と、紫色の空に、響いて行く、その響き、音を慕つて、色々な國、色んな町から、集つて來る、露西亞の民と同じでした。

私は、遂々、東京に、歸へりました。

着いた、朝でした、K氏が訪ねて來れました。

そして、いきなり『遲いなあ』と云つた。

『遲いよ君は』と云つたK氏は、貴女に、まだ話さなかつたが、去年の暮から、此の三月迄は、大阪にゐたのですよ、

——書　翰——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なんでも『生』にいきて行きたい、とか云つて大阪へ行つたのです。
私が大阪に行つたのは、十一月でしたね？
K氏は停車場にゐました。
紫色の土耳古帽を、かぶつて、ズボラッとした、黒い羅紗のマント着て。そしてね、私が驚いたのは、あの、お自慢の、束ね髪を、切つちやって、例の、アブサンのお連中の様なチヂレッ毛になつて。
若さを持つと云ふK氏『生』にいきたいと云ふK氏はこんな思い切りの好いあの人にとつては大膽な事をしてゐました。私は、感心してしまつた。
なんでも北の印刷工場で、使いなれない繪具でいろんな版下を書いてるんだつて、その時はいつてゐました。お賓が少ないので困るとも、
大阪に着いた四五日過ぎから、H氏の紹介で、そこに通つたのです。東京の人達からでさへ、不思議な人、變り物だと云はれてゐたK氏ですもの大阪ぢや、新聞に迄、かゝれた程、大騒ぎだつたらしい。
そりやK氏が大阪にゐた、短い月の間ですら、どうも大變な評判でした。
K氏が、雨が降つても風が吹いても、例の丸い下駄はいて、あの服裝で道頓堀河岸から、千日前かけて出歩いたのです、夜八時頃から九時半頃迄に、見かけない日は一度も、無いとH氏は笑つてゐま

した。その時分千日前ぢや、なんでも、江州音頭がかゝつてゐた暦でした、

K氏は、淺草の銘酒屋女よろしく、江州音頭の女に熱中してゐた。その爲めに、毎晩幾月か、通いつめたのでした。

K氏が大阪についた、十日程後、K氏から、こんな葉書が來た事を覺えてゐる。

千日前では、江州音頭の卑しい階調を好み黒い衣を着た、皺をうつ女の面の皮の厚い、だらけた唇の微笑の凄さに身をふるはせる。

築港では、ムーラン、ルージユの踊場を思ひ、青い星のやうに、海を隔てゝ見ゆるアーク燈を見つめながら、ピーヤの大きい杯を上げた、　二十二日、

とにかく、私達のK氏は、こんな方面に、こうした、趣味と肉感を絶えず持つてゐるらしい。

F子がK氏を捕へて、なぜ銘酒屋の女と淺草を好むかと聞いてゐた時が有りましたつけ、

その時K氏は、Fさんなんぞに、語つたら、すぐ絶交だなんて、いはれるからよそう、と云つてゐました、翌日、H君の宅で逢つた時私に、こんな事を云つた。

私が銘酒屋の女と淺草を好む事に理由を付けるのは、それは女の人達の前に――學問を受けた女の人の前に語るべく、少し悲しい事實であると思ひます。私は、あの毒々しく青く見ゆる程塗つた白粉にも若いやうな感じのする眞赤な唇にも悽慘は感ずるけれど毫も嫌厭は感じません。モウパッサンを好み、アメリカ物語に顯はれた人生を好み、ドガーのムウブメントを好むものはロートレクの如く、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ボードレールの如く、怖ろしい病毒に、この小さい體を食まれて、狂病院の中で自殺する事を天國に行くより樂しく空想してゐます。けれどそれは何時でしよう。Fさんは屹度、僕の『生』を知つたら、その豫想外なのに驚くでしようね？だから僕は、きのふ答へなかつた。

私は、K氏を、いつ迄も若く、生かせて置きたい。

こんな風な調子で、K氏は、どうして、大阪に、長く働く事が出來るものですか、職工として藝術家として、男として、人間として、

又『大阪』もK氏を、どうしても、これ以上、長く、置く事も出來なかつた。

それに、東京の同人から度々、激させる樣な手紙が來たものだから、最う二月の末なんか興奮しきつてゐた。工場から月給と、餞別を、もらつたK氏は三月の五日に、遂々、大阪と左樣ならして行つたのだ。

私より、少なくも早く歸へつたと、云ふ事はK氏をして少なからず得意だつたらしい。

それだから、いきなり『君はおそいよ』と云つたのでした。なんだか馬鹿らしくなつてしまつた

K氏に逢つた夜、淺草に行つた。

貴女は、隨分、久しくK氏と、逢はない樣ですが、今度、そう、今度の火曜日あたし又來るつて云つて行きましたが、一度會つて見ませんか、

淺草は、大變な人でした。近頃はいつでも、あんなに人が多く出るんです？

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

國技館なんぞ私は知らなかつたのに、
金龍館に入つて見ました。
入て入て、むせ返へる位でした。
よく出るボビー君に會つた。ボビーによく似たウイリイつて子供も見て來た。
貴女の嫌いな、(勿論私達も大嫌ですが) 日本悲劇が有つた、春風閣とか、それが又、不思議に、K氏の氣に入つた。
淺草つ兒の好きな者が有つたつて大變な悅びだつた、曰く心中、曰く火事、曰く新內だつて、
一體、淺草兒つてこんな者が好きなものです？
貴女は淺草で生れましたつけ？ね、
三つか四つ見あいた時、下の方で例の卷じたてけんかゞ始つたので、臆病同志はさつさと下りて來てしまつた。
又、ひとしきり、やかましい樂隊に、せめられて、銘酒屋の街迄逃げて來た。
新聞從覽所と書いた丸い電氣燈の下に、ベタベタに白粉を塗つた、青い女が立つてゐた、
これでも同じ女の仲間だと思つたら、心強いような、きたならしい樣にも思えた。
銘酒屋女は大抵、赤いテカテカの顏してゐた。
大阪に行かない時は、あんな硝子障子に紙など、張つてなかつたのに。この間などあ、そんな、張

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りつけられてしまつた紙の七分位の、すき間から、まだ彼等のどん慾な目をギヨロつかせてゐるかと思ふと、本當に、氣の毒になつた。

K氏は、私が男裝して來たら、一軒一軒丁寧に案内して上げると笑つた。

淺草つて、とにかく面白い處だつた。

中略

私が大阪にゐたのは、三月位でした。

その間東京に歸へりました、一度、あれはいつでしたか………そうでした、二月の十八日でした、白樺主催でロダンのブロンズが展覽されたでしよう、三會堂で、あの時二泊の豫定で一寸來て見ました、餘程寄るつもりでしが、日數が或る事情できめられてゐましたから、遂、失禮しましたが、……あの時來ました。

ロダンは何處迄もロダンでしたね？肉とパンを食べて生きてる人間だと、つくづく思いました。私は、ロダンの製作の前に立つた時位、痛切に人間と云ふ事を知つた事は、なかつた。

自己の價値を知つてゐたロダンは、又、實に、よく人生の價値を知り拔いてゐた。

そして私は、今迄、自分が接して來て、一番崇拜して來た、藝術品の中で、宗教的色彩を帶びてゐると云ふ事を見出した事が、不幸、たゞの一度もなかつた、けれど、ロダンの作品、否、藝術品の前に、立ちすくんだ時の私は、眞實にその物に、全き、宗教的色彩の、ともなつてゐる事を、信じて、やまな

かつた。即ち私の藝術品に向つての渇望物を見出したのだ、得たのだ與へられてしまつたのだ。Uさん私は、この前（去年の秋でした）貴女に、こう云つた筈です。

私も貴女もロダンの眞の製作をまだ一度も見ない恐らく、二人は、日本の國を離れて行かなけりや、全う出來ないだらう、

と、その時貴女の目は、血走つてゐた、貴女も又私の目が血走つてると云ひましたね、

その、ロダンの眞の作品を、私は見た、恐らく、貴女も見に行つたでしよう。

高村さんがロダンによつて、藝術は眞僞に別あつて、巧拙に上下なき事を敎えられた。と聞いてゐる。眞實そうでしよう、そうでしよう。

私は、貴女と逢つて、ロダンの藝術と、ロダンの人格宗敎について、改めて話し合つて見たい。興奮した最後の二人は、見えてゐるが、私は是非とも會いたい。この話を、するべく、それだけにロダンは人間として生ひ立つた、一大藝術家です。少なくとも、これからの私達を住ませるに、生きさせて行くのに、必要な天地の九分を造り上げる造物主です。キットそうなのです。

私達人間として生れて來た以上は、何處迄もこの異大な人間界のロダンを、誇り、讃美して行かなけりやいけない。

Uさん、日本の國から、こんな、ロダンの様な人間が、いつが來ると、作り出されるのだらう!!

そんな事を思つて見ると、淋しく、なつて來る、悲しくも。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とにかく、此の事は、いづれ會ふ時に充分話すつもりでゐます。

途中でこんな異大な藝術品にあてられた、せいでも有るまいが私が大阪にゐる間は豫期してゐた程私の思つた事が出來なかつたて驚いた。

一つは、大阪と云ふ土地が思つてゐた程心持よく、私を遊ばして來れなかつたのでも有らうが、とにかく、私は大阪は、今度で、つくづく、いやになつた。やつぱり、遊ぶのにも、勉強するにも、東京は全く好い方便の都合で有つた。

私が丁度歸へる間近に文藝協會の『人形の家』が公演された。

私が大阪に立つから東京で公演されたから、私は遂々見る事が出來ないかと思つてゐました。だから本當に嬉しかつた。

人形の家――は二度觀いた。

土曜の晩と、木曜の晩だつた。最初の時は、序幕を少し、見落したので、遂々しまい迄、舞臺と、自分とが一所にピッタリ合ふ事が出來なかつた。

二度目に「人形の家」を觀いた折は、同人の加藤氏と一所だつた。岩野泡鳴氏も同人の岩野清子氏も隣りにゐられた。

大阪の特長を寄せ集めた様な婦人團體がごちごちと棧敷に並むで皆さん、至極神妙に觀てゐる時だつた。

その日は、私の仲間が二三人と學校友達も三四人來てゐた。

私から、廻状をした連中です。H氏も來てゐました。それから、貴女の親しいN君も、皮肉面を、さらけ出して、舞臺のノラを一生懸命に、にらむでゐましたよ、

私は、どうにかして、團體の女達がどんな風に、ノラを見てゐるかと云ふ事が知りたかつた。

丁度いゝ調子に般ばれて、私はH氏の紹介で、その團體見物の幹部のI氏に會つた。

そして、ノラ劇の終つた、幕間に。有力な!と云ふても、高女出身の人だが、まあその會の委員の人達に引合されて、二三、感想をきく事が出來た。それはね、Uさん、不幸、私が感心する程に、又、團體總見なんつて大げさな事に、なされた程に、いゝ話してはなかつた。

揃も揃つて、こう云つた、

ノラは何もあんなに迄思い切つて、夫を、捨て、又、可愛い三人の子供迄、ほつて、家出なぞしなくてもいゝだらうに、又、そんな風に家出する迄に、自分の位置なり周圍なりに氣がついてしまへば別段家出なぞしなくてもいゝ。元の通り、ヘルマーと子供と一所に住むで、氣長に、悪い習慣？を直し、自分の見た、知た、自己を敎育して行けばいゝ、決して、あの場合家出なぞする必要がない。又勿論あゝ迄、怒る、考へる必要はないのに。

とにかく、日本の婦人はあれぢや、だめだと思ふ今の日本のです。よ………

Uさん、

———書　翰———

貴女は、どう、この感想を見て呉れますか、

私は、どうも驚くより外に仕様がなかつた。あんまり、常識の有る人達なので、(私から見ると)肝腎の作の生命 成立を些とも了解し得ない、之等の婦人は、私達と同じ様に若い、若い女です。

貴女がもし此の意見を、感想を、そんな、若い女の云つた事と考へられますか。

私は、どうしても、考へがつかない。會つてゐればこそ、若い婦人だとは思いますが。物の調和をのみ心にかけてゐる人達でしよう。今頃ノライズムなんかの感想を持出して、貴女になんか聞かせるのは、可愛想です。

けれどね、東京と大阪の若い女の違つてゐる所が何處かに見えるし、又、大阪根性の幾分かも、うかがわれるかもしれないと思ひます。

私は『人形の家』を讀むでゐなかつた、そしてその讀まない人達或はその人達の方が九分有つたでしよう――と一所に、劇として知つたのです、ですから、今、此所に感想めいたものを送つて、貴女に笑はれる筈です。

だから、私を、若い女で、そしてイプセンの作に始めて、ふれて、驚いたり、悦こむだりしてゐる人間だと思つて下さい。

私は、『人形の家』の『命』は、婦人として先づ最初に自分を教育して(婦人自身を)男子と同じく、思慮、判断、これらの力を相待たなけりや、眞實の結婚は到底得られるものぢやないと、思いまし

た。

そして、私は、婦人が教へられる芝居と云ふのは、「人形の家」が一番いいと考へた。

私は、解易ひ謎の樣な面白味が又解難い謎のような面白味が自然、自然と湧いて來る樣に、考へた、否、實際、幕が下りてしまふ迄そうだつた。

今迄色色の芝居も見た、けれど今度の樣に、疑問が澤山、浮び出した芝居は、見た事がなかつた。

貴女は、ノラとランク先生の間柄をなんと解しました。ノラが、ランクの愛を知つてゐて、あの言葉をいつたとすれば私はノラと云ふ女は、眞實、わざと若若しく仕てゐたのだとも思へる。

ノラと、ランクの關係は、作を本當に讀むでゐない、私には、どうしても解らない。

つつましやかな、ランクの戀に、私は同情しました。私は、ノラが奇蹟を待たなけりやと思ふ、その心持は、泣かされた。家出をするノラ、夫を捨て、子供をすてて自分は先づ人間とならねば、ならないといつて、人形の家を去つた、ノラを、我儘女だとか不道德だとか、家を出なくてもいい筈なのに、とか云つてる人の氣持が本當に、ノライズム以上に知つて見たい。

普通の女として實際に於て容易に有り得ない處が、私はノラ劇のノラ劇たる所だと思いました。

女と云ふものを理解してゐなかつた男子にはノライズムを五六度も見せてやりたい。

皮肉家のN君は、終つた時イヤドウも、と、少なからずあてられてゐたらしい。

それでね、大阪の公演としては東京と大變に違つたらしい。不思議な事には、大阪の男が女よりノ

ラに同情したと云ふ事です。
私が知つたのは、四十五の銀行員と、四十九の工藝家と、三十五になつた日本畫家と四十二の實業家でした。

それらの人達は、大變に感心して、終り迄見てゐました、私は、それからの人達を通して、感想をきいた、『とにかく、自分でもあきれる位いにノラを同情して見ましたと、けれど、ヘルマアの樣な男は決して意久地がないだとか、冷たい自己主義な人間だとか云ふのは、非常な早計では有るまいか、一體男なんかは、皆、怒りッぽい性のものですけれど情の點に於ては、女に數等勝つてゐる筈です、人形の家にして、三幕目のヘルマアがノラに罪をせめる、あの、せめ方が、男の怒りと云ふのです、もし、あの三幕目の、あの一節を軟かく優しくしたら、人形の家としては何等の効果も有りません。だから、あながち、男をせめる物ぢや有りませんよ、』

これは四十五の銀行員でした。

畫家も實業家も同じ說だつた、獨り四十九になつた、工藝家は、ヘルマアを冷たい、男だと云つた、そして男子にもあんな奴が有るから、女がだんだん我儘になるのだ。女に自覺を與えない、即ち、女、自身を、人間と成さずに、女として取扱つて、終らすのは、誰の罪か、皆男の罪ぢやない？

ヘルマアは鼻下長だ、女に馬鹿にされてゐたのだ、僕等から云ふと、當然ノラより先づさきに、ヘルマアが自覺して家を去る可き筈だ。それになんだ、ノラに家出されて、『奇蹟だ』なんか叫ぶつて本

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

當に話しにならない奴だ。

Ｄさん、私は、此の人の説は、大變に面白いと思つた、そして胸がすいた様に氣持がよかつた。私が先生に紹介しておいた五六人の人達の評は前後大體同じだつた、

Ａは私と同期の卒業生で、今、府廳に出てる人の妻君です、その人曰く、奇蹟と云ふ意味がとうも上手に私には解されない爲か、どうもはつきりそこらが、解らない。が少しノラは生意氣でしよう。連添つてから七年も八年も過てゐるのに覺醒だとか、やれ奇蹟だとか、最初、妻たり、母たる事を考へて置くのが自分の勤め、否本分なのに、その本分を忘れて、いざヘルマーに怒られた爲めに、家出して、人間にならねばならないとは。

とにかく、例外の女、生意氣な女としか思えません。一體、女の美點は、何處に有るのでしよう? ノラは、人間になぞならないでも、先づそこから考へて見たならいいぢや有りませんか。

Ｂはこれも同期卒業の人です、そして此の四月に結婚するので、家庭ぢや人形の家を絶對に見せない事になつてゐたのですが、私が無理に、つれて來たんです。その人は又こう云つた。私の頭は今滅茶苦茶です、そして結婚なんか、まだとてもするだけ人間らしくないと思いました。只ノラがなぜ最う一歩少しても我を折つてくれないだろうと涙ばかり出ます。

Ｃは女學校の教師です、まだＭＩＳＳで。此の人は、美くしい女をのろつてる人なんです。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私ね、ヘルマーが本當に可愛想だと考へる。
妻として、母として、なんの價値もない女と八年も連れ添つて、本當に出來た、子供が氣毒だ。だから美しい女なんか、『美』を除いた外、なんの價値もないものですよ、
日本にもこんな女がゐるかと思ふと、本當に男のノラでも出來なけりや、おさまりつこは有りません。
これには、調子を合せて、返事したり、合槌打つ事すら出來なかつた。
貴女は、こんな女に會ふ事を恐れる筈だ。私も之から、絶對にこうした女と、會いたくない。
CとDは今、學生の身の上です。
なんでも校長からは、人形の家を見ない樣と、注意が有つたとか。
餘程神經過敏の校長と見える。
この二人は、イブセンも知らなけりや、又、全々劇と云ふものを知らない人達でした。
けれど、この二人はイブセンに向つて深い感謝をしてゐました。そして自分達の立場がはつきらしたと、云つてゐました。
總じて女はノラを幾通にも解し、男は一樣にノラに同情したらしい。
Uさん。これだけの人は、みな大阪と云ふ色彩の濃い土地で生れた女です。
なにかしら面白い暗流が有りそうに思はれる。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

下略

私は今度大阪で始めてノラを知つた。

それと一所に松井さんにも會いました。私は貴女に迄、最も貴女の悦ばなけりやならない、そして共に祝福せなけりやいけない事をしらせます。それは、自分が女で有ると云ふ一つの綱をつたつて、自分の藝術の出發點を女で有ると云ふ強みにしてそして、此所から自己の技藝の富さと女自身の内容から溢れ出る自然技巧を築き溜様としてゐる、貴女自身の何處かと、舞臺にあらわれた松井さんのノラに對する何處がゞ一つの樣に貴女を解した私は、松井さんの藝術に付いて考へさせられた。

貴女と同じ樣に、松井さんが眞實出發點到着點を此所に着眼してゐるものとすれば、私は大變嬉しい。貴女も悦むでもいゝ。

どう考へても松井さんは、松井さん自身の女だと云ふ性の上に求めてゐられる。

女優と云ふ一種の型に囚はれてゐない松井氏は、私は決して、世に云ふ女優よばはりは出來ない、私は立派な藝術家として松井さんを見てゐる。

いづれ今度はゆつくり會へるでしよう。

その時に、貴女の話もして、又、松井さんの意見も聞いて見ます。

女自身が自己の性から、新らしい出發點を得て限り有る旅路をするのは、本當に、感心しないで私はゐれない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私はイブセンが敎へた婦人と云ふのは、なんだかその邊に近い樣にも思へる。
私が松井さんに逢つたのは、旅館でゞす。
舞臺で想像してゐた私の畫像は全く破壞されて、此所に、極めて美くしい、尊い『性』の、あらはれた事を自分自身は大變に悅むでゐる。
この話は、後でお目にかゝつて申します。
とにかく松井さんは、藝術家です、私はあの方の頭のいゝのに大變驚いてゐます。
坪内先生も松井さんは勉强家だ珍らしい勉强家だといつてゐられた。
抱月先生も天才でしようと、云つてゐられる、
私は女と云ふ、いとし氣な者の內から、今、松井さんを改めて得た、見出した事について一所に祝福したい、私達の途には、强い光りが絕えず光つてゐる、私達は、肉體の續くかぎり頭で働いて、そして死ぬ迄、怠けものに、なりたくない。
遊ぶ時は卽ち働いてゐるのだ眞面目に、そして勉强する時は、卽ち樂しむでゐるのだ。
ね？Uさん、私達は、大きくなりたい。
理のわからない事を澤山かき出した。貴女も、さぞ、くたぶれたてしよう。私も充分疲れました。

……………………………………………………………………………………………………

それから――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

きのふR氏に會いました、
そして九時頃迄、いろんな話を、きれぎれにして笑はれて來たその時の話ですが、なんても、私が大阪で書いた小說號の表紙が大變に疑問になつてる層ですが、貴女にも、あれが解らないでした？
あれは、本當に解らない筈です。
あれは、私が勝手に作り上げた、傳說から取つたのです。
世界の人間が最も、ほしがつてゐる者は、不思議な國に藏されてゐる、眞黑な壺だつた。
その壺は、たつた一よりない。
その壺を得たものはどんな强さでも弱さでも自由に使い分ける事が容易に出來る。
けれど、その壺がそれ以外に、どんな不思議な力を有つてゐるか誰一人、知つてゐるものがない。
只その眞黑な壺の上には白く、BLUE—STOCKINGと記明されてゐるばかりで。
私は、それが私達同人の專有すべきものではないか、と云ふ事を考へて見た。
そして、それが眞實私達同人のものらしいので表紙にかいてしまつたのだ。
遠い國つて何處だかどの位の大さだかそれも私は知らない。それでもいゝ樣に思へる。
まだかきたい事が澤山有るんだがもうよします。
私はしばらく會えないだろうと思ひます。
それで、珍らしく長い手紙をかいたのだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

だから、貴女の氣のむいた時一度來て下さい。

私の室は光線の氣持よく入る、庭に接した、下の座敷です。おとついどつさり草花を買いました。どれも、これも、きれいに咲いてゐます。

草花の色々を使つて一枚、なにか描ふと思つてゐる。今年は大變に責任の有る年だので、少からず困つてゐます。

六月から木曾の方に入ります。

そして秋の製作は、そこで煉り上げようと考へてゐる。

印度に行きたいと、常々、貴女に話してた私の印度行も、まだはつきり解つてゐないが、今年の秋の成績で許して呉れそうです。

日本と云ふ國から別れて、印度に行けたら、いゝのに。貴女も祈つて置いてほしい。

私の凡ては、彼の熱い國から絶なく湧き出すだろう。私はそこで死むでもかまわないと思つてゐる、これについても話しが有る。

是非遊びに來て下さい。

左樣なら。

春―十五日―夜る。

大阪で五六枚、木版をして來たから、それも見てほしい。「赤裸の女と豚」が一番、私の氣には、入つてゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

焼畫を少しやつて見たかつたが、材料が一寸手に入りにくかつて見合せた。
いつか貴女に話して置いたテーブル掛け、あらかた出來上つたから、今度あげましよう。
今、面白い布にコッタものを、やり始めて見た。
地は赤と、青と、紫と、黑だ、
貴女が見たら、たまらないと、いゝそうだ。
大阪にゐた時分、よく遊びに來た本間氏が十日の朝訪れて來られました、
そして、貴女の番地が聞きたいといつたので、敎へましたから、そのつもりでゐて下さい。
木曾に入つたら、少し陶器をやつて見ようと考へてる。
とにかく、どうにかして遊むで行くだけの澤山のマネーが有ればいゝのにと考へないでもない。ロ
ダンだつて、肉とパンを食べてゐたもの。

左様なら。

追伸
今、妹から、こんな便よりが來た。
疲れてゐる、私と貴女には、非常に氣持のいゝ手紙だと思つたから、書いて送る。
何處を讀むでも、F子と云ふ感じがするでしよう?!…………
お祝詞

御立派な御成績をお喜びいたします。

ふくみ

お姉上さま

（異の成績でしよう、たしか！）

大變に、暖かになりました………

お父さまも貞ちやんも、姉さまもお機嫌に良い日をむかへて、御出遊ばす事を、何よりお悦び申します。

何をいつても、こちらは、お母さんと私の二人きり………着物を縫つたり、物を考へたり、本を讀むだり、オルガンの鍵を押へたり、毎日、々々、同じ仕事に日の長いのを、びつくりしてゐます。昨日は大變に、お目出度い日だつたのです。… どんなに、いつてよいやら嬉しくて嬉しくて堪りません。

カナリヤに赤ちやんが生れました。

見た事もない美くしい、ちいさい卵を、彼女の巣の內に見出した時、どれ程の歡びに私だちが包まれたか、思つても見て下さい。

ちいさい卵は薄い空色のづら〳〵の小さい殼をもつてゐます、そして、その形よい、ちいさい殼の中にはやがて、生れる優しい唄い手の命がはいつています。

若いお母さんは、物靜かに巣の中に卵を抱へております。
困ることには、時々卵の事を忘れた樣になつて、若い父親の小唄と一緒にさわぎ廻つたり、宿り木の上で暖い日光を受けたりしてすつかり子供もうつちやる事なんです…………
今朝、又一つ卵がふへました。
けれど、大變おそろしい事が出來ました。
私の一寸も知らない何時のまにやら、新しい唄い手の命が、かわいそうに、親達の、嘴によつて破壞されてしまつた事です。
カナリヤは、よく卵を自分で食べてしまふと云ふぢや有りませんか……本當に心配で心配で……もう一しかない卵を出したり、入れたりしてゐます。……どうすればいゝのか、いくら考へても好い考は打ちあてられません。
そしてやつぱり卵は巣の中へ、しまつてちいさいお家を暗い所に置く事にしました。…………
……この恐しさが、すつかり歡びを消してしまひました。
どうかして、小い音樂家がお父さまやお母さまの、きりようよしに似て、優しい目を見せてくれる樣に、一生懸命に思つてゐます。…………お貞ちやんは一體どんなにしていましようか……
…私は、それを考へてゐるんです。
髮は毎日結つてやつて下さいますか?!

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

本當に、ていちやんには、カンカを結ぶ方が可愛らしいんですから、忘れない樣にリボンを、かけて上げて下さいまし………。皆樣によろしく、あまり淋しいんですもの
お手紙でも頂きたう存じます。
十四日
ふくみ
お姉さま
………夜になる時。
■四五、四、一五夜■
――尾竹紅吉――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

肖像畫

下僕のペッロ一は私が非常に手傷を負ふて居たので冷たひ野外の空氣に一夜を明かさすよりもましだと云ふ樣な考から私を伴れて城の中へ入つた。この城と云ふのは陰欝な壯嚴な建物でもう長いことアペナイン山の中に其のいかめしい顏をさらして居るのである。一寸見た處ほんの近頃又極一時の考で開けたものらしい、自分達は重な建物から離れた塔の中の一番少さいそして一番裝飾の少ない室を陣取つた。室内のかざりはどれを見ても古ぼけた珍らしいもの許りでいづれも金目の高い代物である。壁は花布で覆はれて種々雜多の定紋附の戰利品があつちこつちに飾つてある。それに幾つとなく威勢のいゝ近世風の繪が美しい黃金作りのアラビヤ式の枠の中にはまつて室の景色を引き立てて居る。こう云ふ額が普通の壁から下がつて居る計で無く室のくぼみと云ふくぼみには落ち無く掛かつて居る。一體この城の樣な奇妙な建築法の特色から云へば是非共こうしたくぼみが澤山に出來るのである。私は夢我夢中でこの室の中へ連れて來られていきなり直覺的にこれ等の額を面白く思つた。それでペッロ一に重々しい戶扉をしめて呉れる樣に賴んだ。それに日も已に暮れて居ることとなり枕元にあつた蠟燭に燈もして貰つた。それからベットを覆ふてあつた黑天鵞絨のカーテンも明けはなして貰つたこうして私はよし眠らない迄も折々この種々の額を眺めて思ふ樣考へて見たい而して又枕元に積ん

てあつたこの繪の説明書も耽讀して見たいと思つた長い事私は熱心に本を讀んだ時はずん〳〵と愉快に進んだ而して眞夜中が來た。私には蠟燭の置場所が氣に入らなかつたけれ共よく眠て居るペッローを起すのもと思つて無理に手を伸ばしてもつと判然と本の上に光の來る樣な處へあかりをうつした、所が意外にもこうした事が思　かけない結果を來たした、と云ふのは蠟燭の光が今迄床柱でかくれて居た室の龕の奥迄も照らしたのでまだ氣付かなかつた額が暗の中から浮き出したのであつた。それは二八か二九か蕾の花のやつと綻ろび初めた女の姿であつた。私はちらつとそれを見た切り直ぐと目を閉ぢて仕舞つた、何故こうしたか自分にも分らなかつた。それから暫く目を塞ひだまま考えて居る内にやつと次の樣な解決がついた、それはこうである。もしか自分の目が自分を欺ひて居るのではあるまいか、それからもつとゆつくりもつと判然今の繪を見る爲に神經を鎮め樣とした衝動的働きであつた。それから暫くしてもう一度十分に其の繪を眺めた。今度はもう疑ふ餘地の無い迄に判然と見た。最初暗を破つてぱつと繪布にさした蠟燭の焔は私の漠然とした智覺をかき亂して直ぐとうつつの心持に連れ出さうとしたのであつた、もう一度言つて置くがその繪は若ひ女の姿である、畫家の云ふウイグネット式と云ふ形に出來て頭と肩丈が現はれて居る。スリーの頭付によく似て居ると思つた腕も胸も黄金の浪打たせた細い髮の毛の端も皆一樣に茫然と薄暗い背景の影にとけ込んで居る枠は卵形でそしてムーア式に美しい　金線や銀線で見事に　いろどられて居る、　單に技術として見れば無論橡の飾よりも何よりも繪畫その者が一番巧妙に出來て居る。けれ共事實私をこんなにはげしく又こんなに速急に感動さし

たと云ふのは決してその繪が巧に出來て居るからでも無ければ、その女の顏が優れて美しいからと云ふのでも無い。無論半眠からさめた樣なにぶい私の想像が、生きた人間の頭と間違へ樣も無いのである、私は直ぐと趣向やからくさ模樣や又枠などとつて居るのを見てそんな間違のあらう筈もない又よし一寸そう思ふたにしろ直ぐにそんな妄想が消えて仕舞はなくちやならないと思つた。こんな事を考へ考へ私は大方一時間程も身體を屈めたなりじつと目を据えて眺め入つた。それから遂々自介の腑に落ちる處迄考へつけたのでやつと安心して身體を伸ばした。つまり私が非常に感じたと云ふのでこの繪が餘りに活きた人間の表情に富んで居たからである。その爲に最初私は非常に驚いた。それから途中から迷ひ出してどのつまり私は一種恐怖の念を以てこの繪を迎へた。私は言ひ樣の無い深い深い畏敬の思に驅られて蠟燭を元の場所に置いた。こんな事を考へて居る間に大分手間が取れたので私は再び先きの本を見はじめた、やがて私は今の卵形の女の肖像畫に就いて説明のしてある所を見つけたそれにはこんな不思議言葉が綴つてあつた。

「女は實に絶世の美人であつた、しかしその豐かな頰にこぼれる愛嬌は目鼻の美しさに增して可愛ゆかつた。この女が畫家を見初めて愛して結婚したと云ふのは實に悲慘の極であつた。男は情熱の激しい勤勉な嚴格な而して已に既に自分の藝術を妻の如く愛して居るのである。女は愛嬌のゆたかな得難い美人でしかも仔鹿の樣に嬉々とさはいで遊ぶのを喜ぶ女であつた。凡てのものを喜び迎へて愛したけれど、たつた一つ藝術をきらつた。藝術はやがて女の敵であつた。戀人の顏を自分から奪つて仕舞ふ

繪筆や刷毛やその他いろいろの不恰好な道具をこの上もなく恐れた、こんなわけであるから男が女の肖像を畫かうと言ひ出した時には女はどれ程苦しみ、どれ程悲しんだかも知れない。けれ共女はやさしい從順な性格である、おとなしく默つて幾週も幾週も薄暗い高い塔の中に坐つた。此處には唯頭上から少し許り日の光がもれて繪布の上を照すのみであつた。男はこの仕事に少からず興味を持つて居た、そして仕事は日を逐ふて着々と進んだ、それに彼れは情熱の激しい放恣な氣むづかしい男で、仕舞には全く筆を持つ事に夢中になつて仕舞つた。それで薄暗い塔の中に落ちて來る薄黑い光が直ぐと自分の側に坐つて居る妻の健康や、生々した心を枯らして行くと云ふ事にさへ氣がつかなかつた、無論美しい女の頬の色が日に日に褪せて行くと云ふ事は誰の目にも明かにわかつた、唯男丈にはそれを見る丈の餘裕が無かつたのである。けれ共女は尙少しの不平ももらさずに靜かにほほゑんで見えた。と云ふのは已に世の中に名聲を得て居る自分の戀人がこの仕事に燃ゆる樣な喜を持つて、たとひかうして一日一日と影はうすくなつて行くとは言へ、愛人の姿を寫し出そうとして苦心して居るのを見てはこの場合優しい妻の立場として一口も不平がましい言葉は利けなかつたのである。誰でも此處へ來てこの繪を見た者は聲をひそめてよく似て居ることを驚嘆した。それはやがて男の技能が、かく迄に美しくゑがき出された妻に對する愛情にも劣らず豊かであることを證明したのである。其内段々と仕事が進んで最早終結に近づかんとした時には誰も塔の中へ入ることを許されなかつた、と云ふのはこの作に對する男の熱情が餘りに強くなつて、極々偶にしか繪布から目を反らさなくなつた、女の顏で

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さへ滅多に見なかつたのである。男が布の上にゑがき出した美しい色は、女の頰から流れ出た紅の血汐てある事に氣が注かなかつたのである。それから尙幾週も幾週も過ぎ去つてもう今は僅居に一刷毛と目に一色をおとせばよい迄に進んだ時に女の魂はランプの芯のひらめきの様にもう一度キラキラと輝ひた。それから唇はあてやかにいろどられ目の光も美しく輝いた。そしてしばし男は出來上つた女の姿を恍惚と眺め入つた、けれ共眺め入つた男の手足は見る見る内にワナワナと震えて色は眞靑になつた。而して大聲に

「オー實際生きて居るわ」と叫んて妻の方を見た——しかし其時女はもはや此の世の者てはなかつた、……彼の女は死んて仕舞つたのである。

——ポオー——

——豬　　書——

雨の日

讀みさしの即興詩人を擴げる。讀むのは之で二度目、主人公のアントニオは著者のアンデルゼンだといふ。之を讀んで居ると、知らず識らず詩の様な氣分になつて眼の前を美しい幻が往來する。羅馬の華かな謝肉祭や蘇生祭の奇麗な町が見えて來る。花祭の日に母を失つて孤兒となつたアントニオの生涯は長い詩の一篇であつた。アンデルゼンは此通りの人だつたのであらう。なつかしい淋しみの流れて居る書物である。間から葉書が出て來た。森が崎の新年會は如何に候ひしやと書いてあげた返事だ。「世の中に幼かりし自分を、只々いぢらしいと思ひ候、驚きに眼を見張る許り阿婆摺と思つた我身がまだ〳〵美しい處女で有ると思つた時何とは知らず、不安に胸を轟かせ候よ」とある。

私達がをとなしい。自分でも何も知らないと云ふ事はようく知つて居る。此頃の女は、皆强いんだもの、偉いんだもの、自分が研究する爲めにモデルになつた女さへもあると云ふ。當り前だ、女は人の思つてる程馬鹿な者ではない、さう〳〵卑下してかゝらないでもよからう。と思ふが實際自分達は幼ないのだ世間を知らない。かう考へるとぢれつたくなつてしまふ。（雨の日）

新らしい格子を潜ると次の間に奥様と先生の御聲、そうつと襖をあけるとＮさん一人限、花模様の

ある萠黄のバックにわびすけが、溜塗の花桶に一輪、一輪はぽとりと下に落ちて居る。「お獨り」「えゝ」「ニッコリ」畫架を並べて書き出す。曇つたがまだ、降りもしないお天氣、早稻田座の幟がひら〲と翻つて欅の若芽が美しく萠え出た。何時もかうしてこゝに居ると溫泉宿に居る樣な氣がする。關口の水車の廻る響が絶え間なく聞えて、岸には眞赤な椿が、暗い綠の葉の間々に花をつけて居る。蕗の薹がすい〲とのびて白い花をふいて居る。無雜作に繪具を含ませて畫板の上に置てゆく先生の御筆の跡を只ぢつと見つめて居た。どうしてあんな、種々な色が見えるのかしら、まだ〲自分等の眼は、ごく單純な特別に強い區別丈けしかつけられないのだ。何時になつたらあの樣に描けるのかしらと思ふ許り。畫は出來上つた。こつちから見ると、下の花がまるでつかみたい程、瑞々して、ぽつたりと落ちた許りの樣、上の花も、厚ぼつたい、おつとりした椿の花らしく見える。不動樣の花が坂の上迄散つて來て居る。(曇り日)

「明日御伺ひ致す事を前以てお斷りする筈で書いて置たのを出すのを忘れてしまひましたから何はないて上ります。御留守だつたら改めて、歸るとして、御都合がよかつたら上野へ御同行したいと思ひます。」といふ葉書を朝受取る。よいお天氣だけれどひどい風が出て埃を卷き上げる美術新報主催の西洋畫家の、日本畫、半折が多い。今迄の日本畫とは違つて、すべてが漫畫風の新しい氣分の、懷しい試み許り多かつた。三宅克己氏の色紙短冊、かういふ風に細かな處迄も線を引き色をつけて、眞面目に

寫生をしたものだつたと、學校時代を思ひ出す。傍に居た二三人づれが、お孃樣のお稽古に遊した樣だと、下馬評をくだした。小杉未醒氏の貼まぜ屏風、ほしいとも思はれた。ふとたつた獨り、コートの裾を一寸掻いつまんで歩いて居る長沼さんを御見かけした。「長沼さんが」と云ふと「御辭儀して見ませうか」Mさんはつか〲といつて、「長沼さんで入らつしやいますか」長沼さんは驚いた樣な顔付きで「誰方で入らつしやいますか。學校の方で……」と仰る「否」と許り隨分かまはない人間だと思し召したらう。「御一方で」「えゝ」と許り又別れ〲になつてしまつて、夫ぎり失禮してしまふ。

富本憲吉氏の木版やエッチング、山下新太郎、柳敬助、湯淺一郎、津田青楓氏など、新歸朝者の個人室がある。バーナード、リーチ氏の日本畫、伏見人形の掛圖は排つたもの皆輪廓が鉛筆でとつてある。南薫造氏の辭に、富本君の工藝美術の趣味は、今日の日本に於ける卑俗なるそれとは餘程離れて居る樣に思はれます。遠く東京の地を距つて奈良の邊の自分の靜かな家にあつて、法隆寺の壁畫を見、秋篠寺の木像を味ひながら超然と、自分で更紗の模樣を打ち、布を織りなどして居る事は富本君にとつては、最も適した事だと考へられます。ソシテ恰も畫家が繪布に對して、坐して居る時と同樣な、嚴格な心持ちで模樣を置き刺繡をこゝろみて居るのが窺はれる、ウヰリアム、モリスを最も尊敬して居る君の製作を見ては、又モリスのなつかしい藝術の深い味を多く思ひ出させます。とある。ハンギング、テーブルセンターに更紗模樣をおき、ぬいとりをして居る。奈良とさへ云へば幽しい所なのに、藝術のかをりの高い土地なのに。何となくなつかしい氣分になる。(風の日)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

花が散る。かうして又今年の春も逝く。

細い枝のこんだ梢に、白い點がぽつん／＼と日に日に脹んでゆく。其内に鮮かな蒼い空に急に銀白色に輝く一團が出來る。白蓮の花は咲いたのだつた。それも、もう汚らしく赤くなつたのが目障りだと思つてたら又いつか淺緑の若芽がずん／＼と出揃つて來た。木の芽時！山の手の春の暮れから初夏の頃は一番好きだ。十六日に筑波園の案內狀を受取つた。今度は何だか行つて見度くてたまらない。新年會は失禮したから今度は都合して、行つて見樣ときめてしまつた。田端、春といふ事が何だか私の氣をそゝり立てた。皆樣にも御目にかゝりたかつたので。

田端の坂を上りながらも今電車の中に居た二人の西洋人の女の聲が妙に耳につく。上野で乘るとすぐ、二人して、頻りに菓子パンをたべて居るのに先づ驚かされた。田端に來た時、「此所は田端てすか」と巧みな日本語を操つて、改札口では驛員に、「チョイト荒川迄はぢき」と聞いた。「一里許りでせう」「車で行つたら、どの位とられませうね」と、如何にも鮮かな日本語だつた。服裝のかなり立派なのに何者だらうかと思はれ、あたり關はぬ風つきには小憎らしい氣がした。坂を上り切つて右に、小洒な小路をぶら／＼と筑波園を尋ねながらゆく。向ふから來た學生二三人通りがかりに「Spring dress, very good!」とどなる。

眞すぐに這入つて行つたが人の居る樣子もない、娘らしい者にお女房さんが髮を結つてやつて居て

紺の法被を着た男が椽側に寢そべつて居た。「あの青轄の方達は來て入らつしやいますか」といふと「あゝ、それは昨日で御座いますよ。貴女では御座いませんか。お出にならないつて、頻りに電話をかけたり何かなさつて入らしたのは……」とお女房さんがいふ。受取つたのは十六日の午後だつた。消印は、駒込を午前十時〇分に出て牛込に午後〇時四十分。時日は明後日午前十時――午後三時頃迄とあつた。他には日附も何もない。十八日だなと勘定して、若しかこんな事もと消印の時間迄調べて來たのに。何だかむしやくしやしてしまつて「あゝそうでしたか今日かと思つて……」といふと「それは御氣の毒樣でした。まあ御ゆつくり、御茶でも召し上つて……」と氣の毒そうに言ふ御女房さんの御世辭も癪に障つて、「御邪魔しました。」とずん／＼出て來てしまふ。門を出る時に、「なあに、一人間違つて御出になつたのさ」といふ聲が聞えた。角の果物店の前に掃除して居る主人に、「動坂へはどの位ありますか」と聞いたら「こゝを降りて交番の處を右に曲つて、四つ角を左にゆくと七八町です」といふ。「有難う」と、言はれたまゝに坂を降りて、何でもいゝと西へ西へと歩いてゆく。思つたより早く薔薇新の前に來てしまふ、其の前をはいつて方寸社の門を潛る。たつた一人でお留守居をして居た友は「どうして今頃」と不思議さう。

「どうせ貴女は駄目だらうと思つて、お誘ひしなかつたの。此葉書を御覽なさい。飛んだお笑ひ草ね。私が、たまに何かすると、こんな事しかやりやしない」取り上げて見て居た友は、「これや少しいけないわ。案内狀を書いた方が惡いのよ。如何したつて今日としか思ひやしないわ。」「お女房さんは氣の利

かない奴だと思つたてせうね。きまりが悪かつた」と笑つて言つたが、まだ自分ながら、とげとげしく響いた、去年の文展に異彩を放つた、荒川嶽が室の一隅に置いてある。「あれは一たい何なの」といつか聞いたら、友は「わかる人にはわかる。わからない人にはわからないの」と云つたが、今日もかうして見て居るがまだからない。其の後には伏見人形、奈良人形、博多人形などが一杯ならべてある。四時を聞いて立つと又風が出だした。下駄を穿きながら、「飛んだ處へ來たものね」「筑波が其所から見えるてせう」と笑ふ。八つ手の花がまたぢきに咲くのだらう。（晴れたる日）

——田澤操——

日記の斷片

四十五年一月一日　曇　主は例年の通り元日から飯を呉れと云つてお雜煮をお菜にしてたべてゐた。雜煮ぎらひの人で同棲した初めての正月に私が元日の朝だから御飯をたかなかつたのを叱られたのでもう其後は御飯を用意することにした。然し新年の朝の殊に物質的に新らしい氣持をさせる雜煮の匂ひをきらふ人は珍らしい。それにつけて思ひ出すが、これも初めての正月に、ささやかな門松を飾つたのを、おれはそんなコンベンショナルな習慣を追ふのはきらひだ。來年からはよして呉れと云はれた。それでも新年賀狀を世間なみにお出しになるぢやありませんか、と云つたら何とも云はずに默つてしまつた事があつた。强て世間の習慣に拘泥するのも愚な話ではあるが、又わざと世にすねた風をするにも及ぶまいと私は思ふ。

　池田に移つて、近隣とは平生往來もしないし、社の同人も特別な人の外は家まで尋ねて來る人もない程だからこちらからも年賀に出る所もない。世話もないのがうれしいとも思ふし、又物足りなくも思へる。

　玄關の名刺受には出入りの商人の名刺が五六枚淋しくのつてゐた。

主は社の祝賀式に出なければならない。早くきものを出して呉れ。昨夜から云つてあるぢやないか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と新年初ごとを云つて漸く八時半頃にお出掛になつた。
午後二時　主歸宅。朝早く起きたから眠くつてしようがない。床を敷いてくれ、賀狀はきてゐるか。
近所で年賀に來たのへはあなた行つて名刺を置いてきてくれ。
さう云ひながらも、袴と羽織をぬぎすてすぐつぎ（下女の名）の敷いた床の上にどさりと横にたふれたがもういびきになつてしまつた。

私は小紋の紋付に着かへて、お向ふの家と西隣りの家と、北隣りの家へ名刺を置いてきた。どの家もしんとして玄關の格子の外に急ごしらへの名刺受の箱をつるしてあつた。私もそこへ投げこんだ。その序に少し新市街を歩いて見たら、常は門もくゞりも閉ぢて二階の雨戸も多くはしめきりにしてあるのが、それでも今日は門だけは大方開いてあつた。然し年賀の人の往來も見えない。只門松が曇つた空にかぢかんだ樣にしよんぼり立つてゐるばかりであつた。

夕刻加藤信正氏（大阪新報記者で主に一箇月ばかり遲れて東京から入社した人）年賀に來られた。今日の賀客はこれだけであつた。二階の客間で主と三人で闘球をした。

例年より年賀狀は少ない。こちらでも成べく少なく必要な人へだけ出すことにして昨年より五十枚程年賀はがきを少なくしたせいもあるのだらう。

二日　神崎沈鐘氏年賀に來る。三人で寶塚の待合〇〇へ行つた。

ここの女將は、去年の秋、高槻の伊藤吊花氏の宅へ茸がりに呼ばれて行つた時、齋藤氏から紹介さ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れて初めて知り合ひになつた。其時齋藤氏から「女學校を卒業してから藝者のやうなこともしたし、今は又寳塚でいきな商賣をしてゐる。」ときいてから私は好奇心で其待合へ行つて見たのは二三箇月前だつた。其後も三四度女將を尋ねて行つて、大分親しくなつてゐる。「身の上ばなしをおきかせなさいな。」と私が例の様に云ふと「新年になつたら一日ゆつくり御馳走でもたべながらお話します。」なんて云つて中々きかさない。年は廿三だとか云つてゐる。が商賣がらかそれよりはふけて見える。靑白いきめの細かいなめらかな肌に目鼻立のすつきりとした顏が中流以上の奥様らしい品をそなえてゐる。黑いつや〳〵した髮を、根の上つた丸髷にゆつてゐることもある。又油らけなしの廂髮にゆつてゐることもある。美しい人だけにいつみても、どんな風でもうつらない事はない。寳塚の藝者四十何人中この女將に及ぶものはないと云ふ評判ださうだ。

勿論良人らしい人がゐた事もない。母だと云ふ老人と、自分の先夫のわすれ形見だと云ふ三ッばかりの女の兒と、外は仲居ばかり、藝者や仲居のなれのはてでもなささうだし、何をさとつて待合を始めたのか、旦那らしい者でもあるのか、私には想像がつかない。その美人の半生を知りたいために、私は今日も主と神崎氏とを案内して來たのである。

いつも通される武庫の淸流に向つた座敷には先客があるので、東向のせまい庭に面した六疊の間に通された。向ふの座敷からはなまめいた話聲にまじつて、女將の浮ついた笑ひがきこえた。仲居のお君が火鉢や座蒲團をはこんで來たりした。がいつまで待つても目的の女將が出て來る様子がないのでつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

まらないからぢきに歸りかけた。とお君の知らせて向ふ坐敷から飛んで出て來た女將が無愛想をわびながら送つて出た。

「春から病氣してゐたものですから、髮も結はずにこんななりてゐます。」と云はれて見ると成程顔色も常より青ざめてゐた。油氣なしの洗ひ髮を無造作にくし卷にしたのが二三本パラパラと頰にかかるのも艶に見えた、スミレ色のうづら縮緬の紋付の羽織が色白の顔によくうつッて女の私でさえ見とれる程だつた。

三日　社員が三人午後七時から遊びに來られた。一人は俳諧師のかぶる樣な帽子を座敷に坐つてもぬがないでゐた。後で主から聞いたがこの人は髮の毛が一本もないのをかくすためにいつでもあゝしてゐるのださうだ。して毛皮のついた外套をきてゐた。

一人は辨當官吏のやうな黒い背廣の洋服の膝のあたりの圓く延びてゐるのを着てゐた。一人は銘仙のふだん着らしいえり垢のついた着物に、なえた鼠セルの袴をはいてゐた。

どの人も年末賞與の少ない事をこぼしてゐた。

酒肴がならんだ頃、駒之助(藝者)と鈴やと云ふ舞妓がやうやく來た。駒之助は鼠小紋の二枚重ねに桐の五つ紋を着てゐた。

例の俳諧師のやうな人は駒之助に通がつたしやれを云つたり、勸進帳や辻君などを注文して大分こまらしてゐた。

「何分田舎の藝者だすもん六ヶ敷い事はようしまへん。そのおつもりでお手やわらかに願ひますすさ。」としきりに遁げてゐた。

「今日の事だつさかい。御題にちなんだのを一つ舞ふてもらいますさかいみておくれやす。」と鈴やに目でさしづして舞はしたりした。

舞妓は、黑地に赤で牡丹の花を出した友禪の裾を引て「姐はんどうぞ。」と一々挨拶しては舞つた。洋服の人は鈴やの赤くむくんだ手をむりに引つぱって、「いまに此手は霜やけでみんなくさつてしまふ。」と云ふと鈴やは目をまるくして氣味惡さうななき出しさうな顔をした。

「お前はいくつだ。十五になつた? さうかぢやあもうそろ〳〵旦那を取らなくッちやいけないぜ。」なんてからかはれるとむきになつておこつてゐた。

「この子はもうすこし色氣が出るやうになれば舞ひが上手になれる。」と主はおどりぶりをほめるとうれしさうにしてゐた。こんな商賣をしてゐる子にしてはおぼこで可愛らしかつた。

九日　晴　十日ゑびすの宵まつりで池田町は大變な賑ひだ。

米屋町の檢番のあたりへいつてみると、元祿姿の遊女に粧つた藝者が、屋根に造花の梅や櫻を飾つた枝にめい〳〵の源氏名を丹さくにさげたのに紅白の縮緬で籠のまわりを段だらにまいた乘り物に坐つて、町の若い者が、二人宛其籠をかついでまわつてゐる。

上の宮も下の宮も、其賓惠籠をみようと近郷近在の群集がひしめきあつてゐた。

十日　今日も賓惠籠をかついでまわつてゐる。本町通りはあやめ、おもちや屋、蓄音機などの露店が出て群集の中心であつた。

下の宮（吳服神社）では、社のまへに三抱もある松の木の大かゞりをたいて、ほうづき提灯で鳥居のそばをかざつてゐた。

社の右にあるゑびす神社では、急仕立の拜殿で、テンテコ、テンテコと單調な太皷の調子につれて白衣の巫子が器械人形のやうに鈴をふり〳〵單調に表情のない顏をして舞つてゐた。

宮の前の大かゞりの側には二百ばかりの人が、かゞりの火に照らされて黑い大きな塊のやうに見えた。そばに行つて見ると、のぞき目がねの忠臣藏の看板のまわりに集つてゐるのであつた。夫婦の口上云ひが左右に六尺ばかり高い臺の上に坐つて、細い竹で調子をとりながら交り番に判官の腹切りから義士の打入りまでをお經のやうに讀み上げてゐた。

私は、のぞき目鏡と云ふものを此處で初めて見た。

都會の見世物は、活動寫眞に全盛をうばはれてしまつたのに、前世紀の遺物然としたこんな見世物が、池田あたりではまだ餘喘を保つてゐるのを見ると、電車は出來ても電燈が町を照してゐ、そこにまだ枯々に殘る古い空氣が鄕土の色を見せてゐるやうな氣がした。

十一日　昨日から布團の洗濯に賴んだ婆さんが來てゐる。年は五十五だとか云ふが白髮染て地肌の

すいた髮の毛をどぶ泥のやうにごて〳〵とぬつて未練らしく少さな丸髷に結つてゐた。年寄は年寄らしくあつさりとして置いたらいいのにと思つた。

私が時々茶の間に行つてみると、例の泥でかためた様な髮も、めくら縞の絆纒も、綿ぼこりで霜降りのやうになつてゐた。其綿ぼこりの中から、大きな聲で色々と話しかける。例の「さかい」澤山の大阪辯で云はれるので私には何だか意味のとれない事が多い。

夕方鏡餅をわつておしるこをこしらへた。私達二人たべた殘りを其婆さんとつぎに一杯づつたべさした　まだ殘りがあつたから、つぎにたべておしまいと云つて鍋をわたした。

すると茶の間で婆さんが、

「おつぎはん、もうごはんだつか」と高調子で臺所で殘りをたべてゐるつぎに云つた。つぎの答はなかつた　多分口に餅でもほうばつてゐたのだらう。すると又、

「何をしてゐるのさ　猫の様に暗い所でぴちやぴちやといやらしい、あ、ぜんざいたべてゐるのだろ。わたいなんぞはもりきり一杯しきやもらやしない。お前さんは二杯も三杯も替えていい事ぢや」

私は居間でこれをきいて婆さんのいぢらしいさもしい氣持がいやになつた。年をとればあゝまでいやしくなるものか。私もいつかあの年になるのだ、が然しあゝはなりたくないとつく〳〵思つた。

それでまだ仕事は殘つてゐたが、今夜きり斷はつてしまつた

十二日、小雪がふつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新年の雜誌も大分讀みつくした。中では田山さんの「別るるまで」が好いと思つた。
小劍さんから「來月五日頃御地へゆきます。」と云ふはがきが來た。昨年の夏中から行く〳〵と手紙の度に云つておよこしになつたがいよ〳〵いらつしやる事になつたらしい。久しく知つた方にお目にかからないので人懐かしい氣持がしてゐた折からだからうれしかつた。
十三日　夜分池田の荒木氏來訪
青鞜社から二月號に何か書けと云つてよこした。
十四日　主は社を休んで小說發展の執筆を續けてゐる。
夕ぐれ私と二人で猪名川向ふの農藝會社へ見に行つた。温室の中には花ベコニヤや、サボテン、テンヂク朝顏などがさいてゐた。パンヂーを一株買つて歸つた。
夜玉突にクラブに同伴した。私は玉突は出來ないが十五として何とか云ふ人と突いてまけた。
歸つてから、文章世界に出す日記の淨書を云ひつけられて、午前〇時三十分に終つた。池田へ移つてから今日までの分で十八枚あつた。
十五日　久しく怠つた日記を書く。
「此頃英語も讀まない様子だがどうしたんだ。もう勉强する元氣もなくなつたのか」と折々主から云はれる。が私は近頃机に向ふのがものういやうな氣分になつてゐる。これではならないと思ふけれど矢つ張り讀む氣になれない。心が空虛になつたやうで何をするでもなく日を送つてしまふ。私も平凡

な家庭の人になつてしまふのかしらと思ふと自分ながらいやになつてしまふ。
今日は青鞜へ送るものでも書き初めやう。少しは氣分が引しまるかもしれないと思つて机に向つた。

荒木滋子氏より來信

十六日　つぎを宿下りに出す。號外が出た。大阪南區が昨晩一時から燒け出してまだ消えないさうだ。千日前、難波新地はすべて烏有に歸した。午前十時半やうやく五千軒の家を燒きつくして鎭火したさうだ。

青鞜に送る創作がやうやく十枚ばかりになつた。どうも思ふやうにいかない。むづかしいものだ。兎に角「枯草」と名をつけて送つた。

夜みぞれの音がした。

十八日　主と二人で三越で寫眞をとつた。私等が同棲して以來初めてである。何となくきまりきつた型に入るやうな心地がした。

二十日　北村季晴氏下阪の序に御立寄りになつた。同好會の芝居で大分損をなすつたと云つてゐた。それやこれやの苦勢のためか、髮の毛に白髮が多くなつてゐた。顏も旅のつかれで黑く汗ばんでゐられたが、それでも元氣のいい人で、

「おい君はすりこぎみたいな男だな。又此頃は去年より若くなつたぞ。奥さんは少しやせた樣だ。若

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

勢をさせるんだらう。然しいいさ。こんなのんきな處に引込んで二人でさし向ひでゐるなんてしやれた事をしてゐるんだもの。」なんて相變らず冗談をいつてゐられた。

二十四日　雪少し降る。

新小說の三重吉氏の「黑血」をよむ。氏のはいつも舞臺が一つなので千變一律のやうな感じがするが、祖母のオド〳〵した淋しい姿や、小母のネチ〳〵したひがんだ性質、其濕つぽい空氣の中にいら〳〵した神經質の主人公の官能の描寫などは、他人のまねの出來ない境地がある。

二十六日　雨、主は社を休んで小說執筆。夜になつて玉突へ二時間ばかり。私は縫ひものをした。

鈴木三重吉氏の黑血のお民と、發展にあらはれてゐるお鳥との書きぶりに就て話した。お民とお鳥とは下品な性格の一部に相似た處がある。それに就て主人公の感じが、黑血では、一面に倦厭の心に覺めながら、肉に於てのチャームのためにやるせない執着のある所がくどいだけ又よくあらはれてゐるが、發展の主人公は只盲目的に女の若さに惑溺してばかりゐるのがあまり單純で家庭もあり妻子もある又四十近くの男としてはうなづかれないと私は云ふ。主はそれは讀み方がちがつてゐる。黑血の主人公はまだ若い年で、妻をもつた事もない男だけに女にまだあきらめをつける程往生してゐない。義雄の方は婆くさいヒステリーの妻にあき〳〵してゐるのだから、お鳥がよしや不器量であらうと無敎育であらうと、自分の望んでゐる若い女と云ふ句を感じさせてくれるだけでも自分の妻よりはまだしもいゝと云ふ比較からきてゐるのだ。それは只一向甘くなつてゐるばかりでもない。義雄が創作に

夢中になつてゐるばかりでもない。義雄が創作に夢中になつてゐる時お鳥をも忘れてゐる所や、淺墓な虛榮心を利用しながら觀察してゐる態度を見なければだめだとおつしやるこんな事を話してゐる中に三時頃になつたんだらう。お向ふの楠さんの鷄がないた。

■完■

——岩野清——

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

圓窓より

——四月の評論二三——

敢て他の雜誌を眞似る譯でもないが、青鞜にも毎月の評論の評論といふやうなものを掲載したいと同人等は兼てから望んでゐた。ところがかう言ふことは誰しもあまり好まないものと見えて、さてとなると誰れ一人としてしさうもない。いつまで待つても「それでは」と言つてくれる人はどうもなさゝうだ。人の厭がつてしないことを仕舞にするのは自分らしい。どうもいつでもそんなことになつてくるのだから仕方がない。自分はさうした役割を引受けるべくこの世に生きてゐるのかも知れぬ。それが厭な事だらうが、出來ないことだらうがそんなことはどうでもいゝ、只誰れもする人がないと聞くとやつて見やうかといふ氣になるのだ。今一つには自分だつて自分が決して適任者でないことを知らない譯ではないが、此皮切によつて、しかもそれがあまりに見兼ねることによつて、同人の中から乾度適當な誰れかゞ「では私がかはつてあげやう」と出て來られるに相違ないと思ふところから、今度はまあ少し許りやつて見ることにした。

ところで私には何の資本もない。第一こんなことをするだけの豫備智識を有たない上に恥すべきとかも知れないが、文壇に對して盲目同樣である。此盲目者が只自己の無能を知るが故に、萬能を欲する

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が故に、常に、部分我を捨てたる自己の萬能を信ずるか故に、萬能に對する信、これを唯一の資本としてしばらく「私」のあらゆる事情を忘れ、以下の如き妄評をも恥なくして敢て試みるのである。そこは豫め御承知を願ひたい。

白松南山氏の神になる意志(早稻田文學)

私は今迄氏の名さへも知らなかつた。今度四月の評論を書くについて始めて氏の名と其思想の一端とに接する機會を得たるをよろこぶ。氏自身も斷つてある如く隨分一夜の書きなぐりらしい蕪雜のあとも見え、又其發表の順序、文章、用語の不用意から其思想以上に難解なものではあつたが、又前に否定しながら別の言葉で後に肯定するやうな矛盾の個所もあつたやうだが、ともかく本月の評論中私の眼に觸れた限りでは自信あり、從つて力あるもの、氏の眞實と熱誠とを幾分か認むるに足るものとして私はどれよりも力瘤を入れて讀み終ることが出來た。一つには常に何事をも頭腦の一面を以てする單なる知的命題として考へることをしない自分と氏との間に、自分の思想と氏の思想との間に何か相呼應するものがあつたのかも知れぬ。

今も言つた通りだから私は氏の以前書かれた「最深要求の事實化の態度はもとより、泡鳴氏の評言も、イエスの十字架に就て云はれたことも、それに對する能成氏の言說も何もかも知らぬ、私は只この一文によつて總てを想像する丈だ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

泡鳴氏の「實に人間は愚か草木國土一切救濟の道はないのである……解脱は自分以外に何物かを認めてゐるのだ。自分が神なら、救濟を求める譯はない。」といふ數語の中に現はされたる思想を許價することから氏は氏自身の神になる意志にまで論及してゐる。そして「神になる意志以外に自己の生きやうも、在りやうも決してあり得ないことを、そしてその意志は各人の生涯に於て決して實現し得られないものであることを一面に於て徹底的に覺悟しながら、しかも他面に於て、情意的他面に於てその意志を飽く迄も積極的に即ち無限に絶對に主張し、肯定し行くところに只そのところにのみその最高價の生活を生活し得るのである」といふところに一文の主眼はあるらしい。

私はふと「自分が神なら救濟を求める譯はない。」といふ言葉から、或禪寺へ理屈好きの生がやつて來て一寸座禪をして見たが理屈は概念だから中々實在が解りやうがない。で、仕舞に老師の前に出て「貴僧は煩惱即菩提とか自己即佛とか言はれるが、煩惱即菩提なら何も貴重な時間を空費して、座禪なんかしてわざ／＼解脱するにも及びますまい」。と言つたといふことを思ひ出した。

問題はこの自己にある。氏は自分なるものを、現在の自分、事實の自分と、理想の自分、要求の自分との二つにした。併し私をして言はしむれば兩者は所詮一つである。現在の自己事實の自己は眞の自己とは呼べまい。自己が空間的に廣がつた狀態、物質となつた狀態に過ぎぬ。說明の便宜上しばらくかうするとならば別に咎めやうとも思はぬが、これを「二個の自己とし、二種の實在の存在として認める」のは如何なものだらう。よし解脱は自己以外の何者かを認めるものだといふことを許すに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

したところが、その自己以外の何者とは氏の所謂要求の自己、理想の自己、即神を、佛を指すのではない。自分が神なればこそ、解脫と言ふ字にも、又近頃よくきく解放といふやうな字にも意義があるのではないが。神が注意散漫、集中弛緩の大罪によつて得た空間、物質の衣、この自繩自縛から解脫しやうとするのだ。解放されやうとするのだ。アダムが犯罪、樂園失落よりクリストの十字架に至るまで吾々が纒つてゐた窮屈な、つぎはぎの皮衣をぬいで（哲學、宗敎、道德、藝術何にせよいやしくもそれが全人的活動を束縛する以上は、意識の集中を妨げる以上は、皆矢張り皮衣だ。）赤裸々なる自己――「曾て裸體にして愧ぢざりし」自己――全人――神をさながらに顯さうとするのだ。

まづそれはさうとして、次に氏は「僕のシュトルッから言ふと人は決して神であり得るものではない。また少くとも彼の生涯に於ては及び人類の歷史的全進行を以てしてさへも、決して神になり得るものではない。」とし、綱島梁川氏の見神を古今の愚想、此の上もない恥曝しと言ひ放つたのは私の理解し難いところである。さういふ氏こそこの上もない恥曝しではあるまいか。シエームの甚だしいものではあるまいか。思ふに斯の如き物自爾の問題を時間や空間の中の現れとして考へるところに氏の根本誤謬は坐するもののやうだ。見よ、「個人的生涯に於ては無論のこと、その人類的全生涯の間に見ることの出來るやうなものなら、そんなものは神でもなんでもないのである。神と呼ぶ必要はないのである。まして人が多寡の知れた期限の間にあり得たり、なり得たりするやうな神に至つてはなほ更無論である。」と。何等の內的觀察內的實驗もなき人の空虛の言說のやうに私には響く。我全存在、全

生命をたくする一刹那の絶對價値を知らなければこそこんなことが輕々しくも、うかつにも言へるのではあるまいか。三世を瞬間に集中する自分は斯くの如き個人の尊嚴を汚すやうな言説を肯ずることは出來ない。悲しい哉、全人格的に命題の意義に徹底せむと努むる氏には似合はぬ沙汰である。

人は何人たりとも實に刹那に神となり得るのである。元來神である人は解脱を求め、救濟を呼ぶときそしてそれが全力的であるとき、いつでも刹那にして神となり得るのだ。神を見るといふも我れ自からが神であるからだ。所詮は神を以て神を見るに過ぎぬ。問ふべきは時間の長短ではない、全力的なりや否やの一點である。何て五十年、六十年の個人的生涯や、幾千年の人類的生涯を問題としやうぞ併しこゝに言はねばならぬことがある。然らば人は一たび神となり得たならば、もう不斷に神かといふにさうはいかない。餘程偉大な神人なら知らず、我々通常人にあつては神の永恒相を保持しやうと思へばそれこそ容易なことではない。そこに、この點に於て吾々の生涯には絶えざる苦悶があり、努力があるのだ。古來神となり得た人は多かつたらう。併し永恒相を得た人は實に殆ど稀れであつた。刹那に神に入る我は、集中の弛緩によつて刹那に遠ざかるのだ。空間的に廣がつて仕舞ふのだ。論者がいふところの釋迦、耶蘇、孔子、ソクラテースの生活にさへあつたと云ふ不如意不滿足の所以は亦こゝに存するのではあるまいか。と言つて、この理由からして人は決して神であり得るものではない。神になり得るものではないとし、最も確實性ある見神の實驗を古今の愚想とするが如きはそれこそ「僕を以て見れば一刻も早く省悟せねばならぬ人類の最大の恥辱」と言ふべきである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

次に從來の道德宗教が保證する最後の根據理由を「個人又は人類の主觀の救濟、主觀の解脫、即ち個人又は人類の客觀をのけものにしての主觀によつてのみの徹底的救濟、徹底的解脫が可能であるといふ信條に外ならぬ」といふ。客觀は氏の所謂救濟されたる主觀解脫せる主觀の創造である。自己の創造である。勿論デカルトの「我れ思ふ故に我存ず」てはないが、自己意識によるの外解脫も救濟もありやうのないのは當然のことだが、客觀をのけものにしての主觀によつてのみ云々は今少し思索の餘地があるかと思ふ。さすれば人間を弱くし、小さくする一個の迷妄想だと早斷したり、結核病者の例などを引くことのあまりに皮相、淺見なのを悟るてあらう。その時、客觀的には一個の無能低能、不如意、不滿足だらけの人間が主觀的には神てあつたりするなどはあまりに悲慘な滑稽だなどゝは言はぬ筈。聖者と覺者と、豫言者と、無我と、大我と、見神と、神子の自覺と大悟徹底と絕對獨立と解脫と救濟と佛と神と是等の空名をずらりとあげつらつて、その中に不正直と、無氣力と不聰明とのどれかの惡德を認めるといふのも其實境涯を、內的狀態を覗はずして只外部的な、觀察から言ふのではないかと疑つても見たくなる。論者まづ、自己の內部から、聖者となり、覺者となり、豫言者となり、無我となり、大我となり、神を見、神子の自覺を得、大悟徹底し、絕對獨立を得、神となり、佛となり給へ。其物となつて其物を檢し給へ。果して、不正直と、無氣力と、不聰明とのどれかの惡德を認むるや否やをその時にして氏と共に語らう。

言ひ方が大變下手なやうだつたが、要は、論者の各人は其生涯に於て神となることを絕對に不可能

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なりとするは吾等人類にとりて許しがたきシエームなりとし、私のシユルトは何人も刹那に神たり得ることを絶對に主張し、同時に神の永恒相は不斷の努力、神たらむとする絶えざる意志によつてのみ維持せらるゝものなりとし、そこに無限の苦悶、不安、不如意、不滿足の生活を我等の上に是認した積りである。

相馬御風氏の近代主義の第一人(早稻田文學)

ボードレエルの內的生活を說明したもの、初めの一段落は氏の氣質として言はねば氣がすまなかつたのだらうがあつてもなくてもどうでもいゝ。寧ろ自分はない方がのぞましい。詩人の苦悶的生活は生來の過度な殆ど狂に近い神經質に基因するとし、靈と肉と、生と死と、美と醜と、神と惡魔と、理想と現實と、悲しみと歎びと是等の相對界を終に脫却することが出來ず、最後まで慘ましき戰鬪を續けた弱くして强き敗北者の矛盾せる生涯を可成り親切に、誰れにでも肯かせるやうに見せてある。自分はかう言ふ人のかうした內生活に對する同情から興味をもつて通讀した。そして一見矛盾なるやうで實はさう矛盾のない單純な人だと思つた。ことに最後の「汝の終る所はクリスト敎の始まる所なり」とヒユネカーがボードレエルの上に當て篏めたといふ言葉に興味を覺えた。併し何となく一體が上調子で、字面で極め付けて行つたらしい個所も多く、氏自身、自分の書いて居ることに透徹してゐないやうな氣持も多少した。なほ欲を云へば詩人があれほど熱烈に、靈肉一致の境地、惡魔と神との合體せる絕對者を求めながら、何故遂にあゝなつたか、神を得んとして得られなかつた復讐として惡魔を讚美

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しながら、何故徹底的に悪魔を讃美し、そのものを絶對とすることによつて、そこに充足境を見出さなかつたか、何故徹底的に神を殺すことによつて、全き神を見なかつたか、なほ是等多くの點に就いて少しく考へてほしかつた。それからふと氣付いたから附記して置くが、「自殺しやうと企てゝナイフで喉を刺しかけた瞬間に、ふと自分の死態の醜さを想像して自殺を思ひ留つた」といふことは「現實の音や、色や、香や、形は靈魂を無限世界へ誘ひ行く象徴ではなくて、彼等そのものが直に靈魂であり、彼等そのものが直に無限であつたのだ」といふこととの何の證據にもならない。形そのものが直に靈魂だといふ境地にある瞬間、そこに死ざまの醜さなどを想像するやうなそんな隙のある、心はそんな弛緩した生活はありやうがない。

金子筑水氏の運命と自己（中央公論）

これはアンドレーフの「人間の一生」に就いての感想とも言ふべきもの。氏はアンドレーフによつて掲げられたやうな短く果敢ない現世に於て同じく短く果敢ない苦樂や、浮沈を味つて遂にまた闇黒の裡に沒してしまふことが果して人間の眞の生活であらうかと疑ひ、併しそれはどうしても否定することの出來ぬ嚴格な事實である。だが事實だから諦めるより外に仕方がないといふ觀方には一種の深い々々物足らなさを感じてくる、この深い不滿の念には更に深い根抵がある。どうすることも出來ぬ必然的運命は少くとも我々の全生活ではない、運命やチャンスに支配されながらも尙其裡に在つて、曲りなりにも自己の小天地を造らうとするところに現實生活の意味を見出し更に進んで我々はどうす

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ることも出來ない生活から再びどうすることも出來る生活に還へるべきではないか」といふ。

曾てこの脚本を讀んで、そこに現はれた人生觀に對し物足らぬといふよりは寧ろ其外部的な、平面的な、個人の意志を蔑にした女子供もよくしさうな觀察を馬鹿々々しく感じた自分は、又所謂シンボリカルな作品なぞといふものは尋常に、眞直に表現して仕舞へば案外幼稚平俗な思想を故とボカして、何かから神秘的な暗示的なあるものがあるらしく勿體づけて暫く愚者の眼を胡魔化さうとするものかとさへ疑はれたことを今に記憶してゐる自分はもとより氏の主張に異議を提出する氣はない。併し言ふところがあまりに通一遍で、其積極的主張の方面にも何等の力がない。何だかどこか學者先生の所謂「合理的」な御説を伺つたやうで、所謂創造の生活も一毫に生々と、中心に迫るものがない。私のやうな、ロジックを外して、直覺で突き進む傾向のあるものには殊更あつけない。だるい。ぢれつたい。何故もつと高潮し得ないのだらう。思索の徹せざるが故に、氏自らの人格のいまだそこに至らざるが故に、氏自らの生活がなほ憐れむべき運命の支配下にとぎれながらの短き呼吸をしてゐる爲めか。

外面的に見た老幼生死、榮枯盛衰のこの現象はいふまでもなく。現實の眞相ではない。現實の眞相に徹するは外面的觀察の到底よくし得る處ではない。徹底せる現實そこには運命やチャンスの支配を受けない天地がある。即ち現實の中に自己を沒入に了ることによつて得らるゝ自己創造の現實である。これのみ眞なるもの。こゝに我々の眞生活があるのではないか。「必然的運命を人生の嚴然たる事

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

實と認めながらしかも我々が言ふべからざる物足りなさと、深き不滿とを感ずる」はやがてそれが眞でないことの證明ではあるまいか。この不滿の念が宗敎の起原の一つともならう。又こゝに宗敎の存在の意義があり、價値もあらう。凡そ宗敎倫理等は直接實在に關し、人間の內的生命そのものに關し、所謂物自爾に關する消息を知るものである。物自爾なる我れは創造の我である。天地を支配する絕對、自由の君主である。然るに近代文明は科學の發達により、個人の抑壓により、現象界のことのみを過重視し、いつかその根源たる物自爾を忘れて來た。客觀に、外に眼を放つに忙しくして、自己意識に、內に眞の生命を汲むことを久しく忘れて仕舞つた。これが一面から見れば十九世紀の西洋思想の悪影響とも言へやう。東洋思想は外に對してこそ銳敏な眼を有つて居なかつたが、自己に就ては眞に驚嘆に價する程の領土を開拓してゐるに近く佛國に科學萬能の反動として、個人の抑壓せられた反動として、ベルグソンの如き思想家を見るのは我々の東洋人の特に注意すべきことかも知れぬ。自己を絕對に尊重する、どこまでも個人的な、主觀的な禪の修養に曾て多少頭を突き込んだことのある自分はベルグソンの思想系統に多くの意識と、興味を覺えたものである。もとより何程の研究も出來て居ないが。序ながら言つて置く。東洋人は人間の必然的運命を觀じてすぐ容易に諦める、人生は結局さうしたものだと諦めてぢつとしてゐるといふやうなことをよく聞くが恐らく皮相な觀察であらう。

　私はかう言ふ意味から氏の一非常に擴張された客觀生活のために、主觀生活が殆ど犧牲にされた今

日、我々の内面生活の殆ど全部がさながら運命や、チャンスの觀照であるごとく思はれるのはこれもまた眞に已むを得ない必然の成行であらう」といふのを自分は面白く受取つた。

錦田義富氏のギュヨーの道德無義務論（丁酉倫理講演集）

ギュヨーの道德論、特に其積極的組織的方面を論じたるもの。もとより粗枝大葉に過ぎぬが彼の道德論の骨子は理解された、自分は自分の爲めにかういふ眞面目な、親切な、有益な紹介の載せられることを希望してゐる。

ギュヨーは道德現象を事實的道德と形而上學的道德との二つに分ち、從て道德學も科學的道德學と形而上學的道德論との二つとした。

科學的道德學の具ふべき二要件として「經驗の事實たらざる可らざること」と「事實的道德の動力は一切生物に共通のものならざる可ざること」を擧げ、遂に「生」そのものを得た。

次に生活の作用上の特徴として生活に動の強度増加するとき、正常の場合には必ず生活活動の範圍を擴大するもの、而して一切生物、一切人間は自己の生活の强及擴張の極大限を實現せむとしつつあるものなるを認め、道德は「生」の自己發展にあるし、義務意識をもこれで說明した。道德無義務論の名はここにある。即ち義務といふも畢竟生の發展に外ならぬ、生の發展あればこそ始めて義務意識も生ずるので、在來の倫理學者が考へたやうな强制的なものではない。絕對的命令的なものではない生活力は自己に反對するものに打克ちて、他に自己の意志の力を及さんことを自然に要求する、ここに、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心内に一種の壓迫が生ずるところに、意志の力が他物によつて反對されるところに義務の念が起る。故に生活力の强大なるものほど義務の念も亦强大である。自分を外にした絕對的命令としての義務制裁などに何等の權威も感じられなくなつた現代の人々もかく新しい意味で說明され、改釋される時、失はれた義務の念も再び蘇生するやうに思はれる。ギユヨー曰く。

「我は爲さゞるべからざるが故に爲し能ふ」にあらず、「我れは爲し能ふが故に爲さゞるべからず」と何んて胸の奥底までに鳴り響く言葉であらう。自分はこれに出逢つた時、不思議な感に打たれた。自分の言つたことではないが、自分が曾て何處かで我知らず言つたことではないかと。そして戀人の名でも繰返すやうに幾度も心に言つて見た。

さてこの義務意識を智情意の三要素に分ち、それ〳〵說明してあるのだが、理智的多產の下で「思惟のみありて、活動が繼起しないたらばそは思惟が不完全なるか又は謬つて居るからである。」といふのは同感である。思惟にして徹底すれば思惟は即ち實行である。二途に出づべき筈がない。ここに智識によつての義務感情が生ずるとし、兩者の統一が有德で、不統一が不道德（何となれば二者を別々にして放置せば相互間に衝突を起し、互に活動を制限し、その結果「生」の發展を妨げるから）としたのは一見何人も言ひさうなことだが面白い。眞理である。私は哲學と實踐倫理とが常に一つに出てくる東洋の哲學をふと思はせられた。そして新しい頭の人が、新しい眼を以て、見たら屹度新しい多くの意味が發見されるだらうと此種の新研究をも世に希望したく思つた。感情及感性の多產に就て說く處は頗

る穩健だが物足らぬ感じのするのはなほ考察の餘地が多い故であらう。

次に論者は「生」の自己發展で說明されぬ只一つのものとして主義の爲め、眞理の爲めに死を辭せざる志士仁人の行爲即確定的犧牲を擧げた。併し私を以て見れば確定的犧牲も容易に生の發展を以て說明し得られるもの、否寧ろ、生の發展の極致に達せるもの、生の强度、擴張の最大限、生活の最高潮に達せるもののやうに思はれる。凡そ生活の緊張には、壓迫を必要とする。最大强壓の下にありて我等は始めてよく最極度に生の强度、擴張を增大し得るものである。クリストの十字架の意義、ポーロが日每に十字架にかけられたといふのもこの所ではあるまいか。私は實に云ひたいことの多くがあるやうだ。生の發展の極致に就て、生死を超越せる「生」について、生死ふたつながらに具へたる「生」に就て又いふところの「永生」に就いても。併しそれは他日言ふべき時もあると信ずるからこゝでは差控へる。それはともあれ、論者は確定的犧牲をひたすらに科學的說明の範圍を超越せるものとし、こゝに形而上學的道德の起原を置かうとしたのだ。

ギユヨーは言ふ。形而上學的道德は吾人が科學的道德によつて吾人の行爲を解決し得ぬ場合、その行爲を辯正せん爲めに立てたる個人的假設なりと。我々が自己の形而上學を創造するは只單に自己の行爲を辯正せむが爲めであらうか、所謂「希望の哲學」は各自の信仰は只それだけの欲求の上に成立してゐるものだらうか。科學的道德と形而上學的道德との相違は畢竟一は「欲する」の事實に基き、一は「望ましき」なる理想によつて成るところにあるといつてはあるが、なほ自分には飽足らぬ。理解力の缺

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

之によると言はれるか知れぬが自分にはどうも兩者の性質、關係、相違等がまだ分明でないやうに思はれる。若し自分がギュヨーを批評し得る日がありとすれば今後彼に就いて自から研究した後のことである。今の自分は自分にギュヨーを紹介してくれた氏に感謝するばかり、語るべき何の資格も有たない。併し科學的道德學を高調したギュヨーが科學的道德は各人に汝の生活を凡ての方面に發展せよ、强度擴張の活力に於て出來るだけ豐富なる人格たれ等の忠告を與へ得るのみで、眞の道德は各自の道德的價値の創造にありとし、自由に、獨立に道德價値を創造する人を道德の極致に達したものとしたのは注意すべき點だと思ふ。

もう二つばかり手元に雜誌はあるが、今回はこれで許して貰ふ。

——らいてう——

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

松の花

聖女おはすとや南湖院は松の花

今朝來しは斑鳩よ椽は松の花

視谷めし似顔温泉の町若柳

肥料藁切る日苺苗植ゑし

狗背に登山逸話あり君肥大にして

木の芽に煎汁も何の根ぞ加治の法

南山に入去りてより連翹に又詩客無し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

獎學の妻いむも若鮎に酒香知りて
花壇弄りに手荒れ忌む君謠曲もす
株根堀りし松山躑躅花赤き
我が逸話渡舟に聞きし蘆の角
行春の雨に躊躇の旅情斷つ
覇氣の計藏むや若楓の山庵に
君が憂心を聞きし夜を鳴きし靑鷺の

——白雨——

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

その時に政子がフッと思ひ出したのは、大きな破風づくりの玄關口の石段をよけたその右手の羽目により掛つた、桃色の帯を締めた十七の自分の姿であつた。玄關の障子はぴつたりと閉つて居るが、中では、乳母やが末の男の子を寢しつけてゐる氣配はよく分つた。

風が輕るく吹く度に何處からか木犀の香りがして、門内に植えた青木の葉にきら〳〵と日がさして居た。門の外はしつきりなしに人が通る。折々ピー〳〵と笛を鳴らして行く羅宇屋だの、白前垂を掛けた髪結の梳手らしい女も通つた。

政子が其處に來てゐるのは、政子と同じ學校に通ふ其處の家の娘を尋ねたのであつたが、其外にその日は日曜なので、もしやと見たくおもふ人もあつたのである。

けれ共、取次に這入つた小間使がいつ迄も〳〵も出て來ぬのを、氣の小さい政子は、さいそくも出來ずにいつ迄も〳〵待つて居るのである。

表玄關に並んだ内玄關には赤い鼻緒をすげた小さな下駄がいくつも脱ぎ捨てゝあるが、今日は子供の聲も聞えない。門を這入つて右手を建仁寺でしきつた間に、小さく木戸をつけたのは臺所口と家扶の家とへ行く道である。その中にある井戸端では、思ひ出したやうに物を洗ふ音がしたり、忍んで垣

根の際へ來て此方を覗く女のあるのを政子は知つて居た。
磯の、あわびの、片おもひ、
突然障子の中で斯う唄ふ聲が聞えた。
いくら思つてもあゝ〳〵だ。
續けて斯う言つたのは、たしかに乳母の聲であつた。感情の強い政子は、直ぐくわつとして顏が熱くなつた。
磯のあわびの、片おもひ。
再び障子の中では同し唄を繰り返した。
井戸端の方でくす〳〵と笑ふ聲がする。
政子はぐつと込み上げて涙がにじんで來る。
何をしてるんだ。オイ。
ホヽヽヽ。
何を笑ふんだ。
政子は、胸がドキ〳〵とした。懷かしい人の聲なのである。
龍雄さん、何處へ入らつしやるの。之は乳母やの聲とは違つた政子の待つてゐる絹子の優しい聲である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

僕、一寸庭まで…………

其處は下駄がなくてよ。

優しい聲は意地惡く政子に聞えた。

なければ取つて來て下さい。

乳母や取つてお出てよ。

お孃さんの方が好うございますとさ。

おや、取つてくるまで其處に待つて入らつしやい。動いちや厭よ。

バタバタと椽側を奥へ行く音がした。かと思ふと直ぐに玄關の障子が開いた。

二人は待ちまうけたやうに熱した目と目とを見合した。政子の足は不思議に震えた。

アヽお客様だ。

龍雄の聲はわざとらしく聞えた。

おや何方。

もう居ないのかと思つた乳母やが龍雄を退けるやうにして顏を出した。そして政子には會釋もせず笑つた目で龍雄を見て、トンと其背中を叩いて

ハヽヽヽ

と大聲に笑つて引込んで終つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何をするんだ。

二人は亦目を見合はした。

龍雄さん、あら。政子さん。

絹子は、龍雄と政子とが顔を合してるのを不満らしく、ぢつと政子を見たが、直ぐに微笑んで、

さつきから待つてらして？

分りきつた事を聞いて、返事も待たず。

隨分よ龍雄さん。

何が。

何がつて、いゝ事よ。ねえ政子さん。

えゝ？

政子はどぎまぎした。

絹子は夫に構はず。

ハイ下駄。

と其處へ中古の薩摩下駄を下した。着物が一寸めくれて緋縮緬の尋常着の襦袢の袖の下から、柔かさうな白い二の腕が見えた

あゝ、亦忘れた。鉄。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私しらなくてよ。もう。
そんな事言はずに取つて來て呉れ給へ。
仕樣が無いわね。ぢや政子さんお上んなさいよ。
政子さんなんか後にして僕急ぐんだよ。
だつて何をなさるのよ。
繼木をするんだから、お願ひだ。
その人は無造作に紺絣の着物を着て、手に小さな枝のやうなものを持つて居た。
ぢや、直ぐ持つて來てよ。
絹子は襖を開け放しにして應接間を拔けて行つた。
後の二人は又ぢつと顏を見合はした。政子は身が震へるやうだつた。目が燃えるやうに覺えた。あ此處で何か言つたらと思つた。
龍雄の目も何かいふ樣に見えた。そしてぢつと目と目とを見詰めた。二人はいつもかうして目ばかりで物を言ふのみであつた。
廊下を絹子の來る音がする。
龍雄は忙しげに袂をさぐつて、何か小さな紙切を政子の足許へ投げると、つと下駄を穿いて玄關を左に庭の方へ行つてしまつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

政子は何といふ考へもなしに、直ぐにその紙切を拾つて懐中へ入れた。
まア、龍雄さんは？
絹子の目は政子の顔を疑はしげに見た。
庭の方へ………
と政子は小聲に答へた。
何とも言はずに？
えゝ！
貴女にも何とも言はなかつて。
えゝ別に。
隨分ねえ。
絹子は直ぐ椽を奥へ引返した。政子は夫から、やゝ十分も立ちつくしたが、絹子はもう出て來なかつた。政子は極りの惡い思ひをしながら、再び友達の門を出た。自然に涙が溢れさうになつて來た。何が悲しいといふよりも自分といふものが如何にも氣の毒のやうな氣がしてならなかつた。空は晴れて漸々にもう雲の峰が見えて居た。
政子は空しく家へ歸る道すがら、そつと懐中の紙切を出して見た。鉛筆で薄く、
何處かで逢ひたい。月曜なら家でも好い。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と書いてある。絹子から見せて貰つた事のある美しい龍雄の文字であつた。翌日は丁度月曜であつた、政子は矢も楯も堪らず、行きたくて行きたくて、行つて何の話をするといふ考もなく、只行きたくて、その夜もろくに眠れなかつた。とろ〳〵と眠つたかと思ふと

郵便が來てゐるよ

といふ母の聲に覺まされてしまつた。目を開いた時、もう母は居なかつた。枕元には、殊更に封じ目に幾つも印を押した手紙が置いてあつた、夫は絹子からのであつた。

今日學校へ行けば逢ふものを、もしや俄かの病氣か、亦は何か龍雄さんに係はる事かと、政子の胸は只ならず騷ぐのであつた。

こんな事を突然申しますのは誠に失禮とは存じますが、默つて居て、もし後に間違ひがありました時には、何方にも濟まないと存じますから、一寸御斷をして置きたいと思ふのでこんな手紙をかきました。あなたはもしや龍雄さんを何とか思つてお居てゝはありませんか、もし夫なれば大變な御間違ひですよ。あの人には私の從妹が言號になつてをりますので、他人を妻にする自由のある人ではありませんから、何か思ひ違ひをなさらぬやうに願ひます。まさか人の言號を取るあなたでもあるまいと存じますが一寸お斷りを申して置きます。

絹子

政子さま

政子は全身が冷たくなるやうに思つた。

さうして其手紙を再びくり返して見た、少しの見違ひもない。政子は枕紙の下へ入れた昨日の龍雄の手紙も見た。やつぱり政子さまと書いてある。

政子はとう〳〵其日は一日床の中にもぐりきりで暮した。翌日は學校へ出かけた。級中の人に顔を見られるやうであつた。殊に絹子と顔を合すのが、夫は〳〵辛かつたけれ共。身につゝがない者を遊ばして置くやうな母親を政子は持つて居なかつた。

政子は心待に龍雄の便りを待つた。もし、あの人の目に僞りがないならば、どうして來ぬといふ只一言位の便りはありさうなものにも思はれた。あの目の言つた言葉を自分は讀み違へたのかとも思ひ迷つた。次の月曜もその次のも過ぎてしまつた。もう絹子とは以前のやうに口を利く事も出來ない。絹子の門を通るのも恐ろしいやうに思はれた。けれ共、龍雄のあの手紙あの目が僞りであらうとは如何しても思ふ事は出來なかつた。

夫から五年立つた、龍雄は從妹と結婚をしたといふ便りが絹子からあつた。さうして夫から亦二年過つた。從妹の生んだ子が死んだと言ふ報知が絹子からあつた。そして、多分だれかにのろはれたのでせうと書いてあつた。

政子はまだ獨身で龍雄の其の時の目を忘れずに思ひ出しては考へて居る。さうしてさうする事が人をのろふのかと害も恐ろしくて大抵は一間にとぢ籠つてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

政子は讀みさしの小說に引かれて亦こんな事をぢつと思ひ出して居た。何處かで木犀の香がする。井戸端でぢやぶ〳〵と物を洗ふ音がする。

■完■

——岡田八千代——

前々號にさしあげたる脚本「習作」は「習作戲曲ノ一」と致すつもりなりしに候なほ本文中大なる誤植は領骨とあるべきを頭骨云々と二ツならべたる處に候亦竈にて油土をつかふとあるは舊式の由、今は手にて泥を束ねる由に付此儀一寸訂正いたし度候

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第二幕

二

ソーニャ。（戸をトン／＼と叩いて）ミハイル・リオーヰチ様！まだお寢みぢやありませんか？些とどうぞ！

アストロフ。（戸の蔭から）只今！（少し經つて彼はもうチョッキと襟飾とを着けて登場）何の御用ですか？

ソーニャ。貴方ね、他ぢやないんですが、若し貴方御酒がお好きなら召上つても構ひませんがね、あの、どうぞ叔父にお飲ませ下さいませんやうに願ひます。叔父には毒なんですから。

アストロフ。可うございます。もうやりますまい。僕はもうお暇をして、今家へ歸らうと思ふのです、馬を馬車に附けたりしてゐる中には夜も明けませうから。

ソーニャ。雨が降つて居ります。朝までお待ち遊しましたら。

アストロフ。なに夕立の通雨で、直に止んで了ひます。歸りませう。で、どうぞこれからは御尊父の御病氣について、僕をお招びなさらんで下さい、參つたつて仕方がないんです。僕が足痛風だと云へば、御尊父は僂麻質斯だと云ふし、僕がお横になつてお出でのやうに云へば、椅子に掛けてゐたいと云ふ。終にはもう一日口も利かんと云ふやうな譯ですから。

ソーニヤ。ほんとうに氣儘で御座いますから（戸棚の中を探して。）何か召上りますか？

アストロフ。さうですな。何か頂きませうか。

ソーニヤ。私夜中にね、何か頂くの好ですわ、戸棚の中に屹度何か有りませう。父のことについちや、人の話ですけれど、女によく成功した人だつて云ふことです。ですから皆女達に那樣風に甘やかされて了つたのですわ。さあ、如何ですチイスは（二人は戸棚の前に立つて食べる。）

アストロフ。僕は今日はまだ何にも食はんて、たゞ飲んでばつかり居つたてす。貴方のお父様は實際氣六ケ敷い御性分ですよ。（戸棚から壜を取り出す。）宜いですか？（杯を飲み乾して。）今此所に誰も居らんからお話を致しますがね、僕なんぞは全然一ケ月とは此のお宅にはゐられませんよ、さう申しちや失禮ですが、這麽窮屈な空氣の中にや……まあ、貴方のお父様つたら全然その足痛風と、書物に呑まれて居なさる。叔父様のワーニア君は又彼の通りな、悲觀の厭世家、お祖母様と云へば矢張り彼の通り、更に又繼母様だつて……

ソーニヤ。なに繼母が奈何なのですか？

アストロフ。左樣さ、まあ慾を云へば人には總てが皆揃つてゐて欲しいんです。顔でも心でも、思慮でも。彼女（あのかた）はそりや綺麗です、其れに於て爭ふことは出來ない、然し、……たゞ食べて、寢て、散歩して、己の美を以て我々を皆有頂天にならせてゐる、彼女はただ其れ切りてす。見る所、彼女には甚麽責任もなく、他人が自分の爲に働いてゐやうが、奈何しやうが……さうでせう。て、

這麼徒然な生活は純潔なものと云ふことが出來ませうか（間）然しながら、さう云つちや僕が餘り酷に失してゐるかも知れんです、全體僕も生活を悲觀して居ることは貴方の叔父樣のワーニヤ君と同一なのです、さうして二人とも段々詰らんものになつて了ふんです。

ソーニヤ。ぢや、貴方も生活を憎惡んでお居でなのですか？

アストロフ。あながち生活を憎惡む譯でもないですが、僕等の所謂田舍の生活、あの下らん露西亞の田舍の生活は、僕眞平御免です、僕が全力を上げて、これを排斥するに躊躇しません、僕の個人的の生活についての所見を云ふなればです、實際生活其物に於て、何も好いことはありやしません、斷じてないです。まあ御覽なさい。例へて見れば闇の夜に深林の中で道をたづねてゐるものが、若し不圖遠くに火影を見付けたら、そりや疲れたのも、暗いのも、小枝に顏を引搔かれるのも、一切、何も彼も構はず、夢中で以つて、其の方へ行くでせう……僕は隨分働くです、これは貴方もよく御存じですが、郡内で他に誰も僕のやうに働くものはありません、詰り僕の運命が絶えず僕を怯ら鞭撻つてゐるのです、時によるともう我慢にも到底遣り切れんと思ふ事は度々ありますが。で、然も僕には其の遠くの火影すら、全く見えないのです。ですから僕はもう自分の爲には何事をも期待せず、何人をも愛しもせんのです……疾うからもう誰も愛しはせんのでした。

ソーニヤ。誰も？

アストロフ。誰もです、たゞ自分に始終快く思はれてゐるのは、貴方の所の乳母計りです、舊からの

親昵だから。て今、農民の生活のことについて云へば、一般に其狀態は、單調で、發達してゐないで、非文明的な生活で、敎育ある社會とは奈何しても調和することは難い。所で又敎育ある社會其物は徒に人間を倦み疲らせる、さうして彼等は、淺い思慮の、淺い感情の人間、詰り自分の鼻先より外は見へない、お先眞暗な奴等で、矢張まあ小人です、其中で少しく粒の可い奴は、神經的の自己反省や、分解に全然呑まれてゐる、さう云ふ人間は煩悶と、憎惡とで殆ど病的に人の惡口を云つてゐる。正面でなく、横を向いて人に接してゐるのです、曲つて人を見て、曲つた判斷を勝手に下して居るのです。すぐにそれ彼は半狂人だとか、やれ彼は口ばかりの奴だとかと、て、少し額に符の貼附けにくい奴は、直に變な人間と相場を極める、僕が林を好むと云やあ、すぐそりや變だと云ふし、肉食をせんと云やあ、矢張變だと云ふ。だから這麼實生活に於ては、自然に對しても、人間に對しても、直接な純潔な、自由な關係は無くなつてゐるのです……すつかりもう！（酒を飲まうとする。）

ソーニヤ。（彼を止める）あれ貴方、私お願ひですから、もう召上らんで下さい。

アストロフ。奈何してです

ソーニヤ。貴方にお似合ひなさいませんもの！貴方のやうな氣品のお高い、立派な御風采で、優しいお聲で……私の知つて居ります人の中で、一番私感服いたして居ります貴所が、ほんとうに變て御座いますわ、那麼お酒飲や、骨牌などをする平凡な人達のやうな、眞似を……お止め遊ばせ、

ね、貴方！貴方は何時も有仰いましたぢや御座いませんか、人は天から與へられたものを、建設しないで、徒に破壞してゐますつて……でせう？だから貴方、貴方も御自分を那樣に破壞なすつちや可けませんわよ、ねえ、ほんとうにお願ひですからお止し遊ばせ、ね。

アストロフ。（彼に手を延ばして）もう止めます、是からは止めます。

ソーニヤ。ぢや乾度と有仰つて下さい。

アストロフ。誓つて止めます。

ソーニヤ。（強く彼の手を握つて）どうも難有うぞんじます！

アストロフ。大丈夫！私は變ります。御覧なすつてゐらつしやい、もう生涯全く別な人間になつて了ひます、長く此の狀態を續けます。僕も、もう盛も過ぎて、何でも皆僕にや遲いです……働き疲れた、俗化した、感情の鈍くなつた、愛情でもつて人と深く繫がることなんぞ出來なくなつた所の老けて了つた人間なんてす、だから僕もう誰も愛しはしません。然してす、若し強いて云へば、今僕に些か感情を引起す所のものは、たゞ美其物ばかりてす。實際僕は美に對してのみは、奈何しても平氣ぢや居られません。例へば若し假に、エレナ、アンドレエウナのやうな美人が、仕樣と思へば、たゞ一日で全く僕を狂人のやうに夢中にならせて了はれます……だが、これは眞の戀でもなければ、愛情でもないでせう……（彼に手にて顔を掩ひ、身顫する）。

ソーニヤ。奈何なさいましたの貴方？

アストロフ。いやなに……大齋の時に僕の所で怪我人が痲醉劑の爲に死にましたことを思ひ出して。

ソーニヤ。もうそりやお忘になつても宜しい時分でせう。(間)あのミハイル●リオーヰチ様、あのね、ねえ若し貴方、まあ假にですよ、若しね、私の友達か、又は妹があるとして、其人が誰か貴方を大變愛して居るとお解りになつたら、貴方、其時は奈何なさいますの。

アストロフ。(肩を縮る)。解りませんなあ、何でもないでせうよ、大方、僕は其人を愛することは出來んと見せますでせう……さうして又心に那樣罅隙もないのです。さて歸宅とすれば、もうお暇をせんけりやならんそれぢや失敬します。我々が這麼ことを話し合つてゐたら、朝まで經つても際限はないでせう。(握手をする)客間を通つて參つても可いのですか、でないと、貴方の叔父様に見附かつて又引留められると困りますから。(退場)

ソーニヤ。(一人殘る)彼の人は私に打明けないわ、些とも……心を皆隱してるわ、だけれど、何んだか私、嬉しくて仕樣がないの。(ニッコリとうれしさうに微笑む)私彼の方に、貴方は氣品の高い、風采の可い聲の優しい方ですと云つたが、全くだわ。彼の方の聲はほんとうに何だか少し顫えてゐて、人をいたわるやうに聞えるわ、何だか今もまだ聲が恁う聞えるわ。で、私があの妹のことを云つた時は、彼の方は些つとも察しなかつたつけ(指を組んで兩手を下に伸す)あゝ私奈何しやう、厭だわ、厭だわ、私器量が惡いんだもの、私自分で知つてるわ……この前の日曜日だつた、聖堂から出て來やうとすると、何處のか婦が、私を見て云つてゐた『あの娘は氣立の優しい、心持の素直な可

い娘だけれど、惜しいことには器量が惡いねえ」……て、云つてたんですもの、器量が惡いつて………

（エレナ・アンドレエウナ登場）

エレナ・アンドレエウナ。（窓を開ける）。夕立が通つて了つた、何といいこの空氣！（間）醫學士は何所へ？

ソーニャ。歸りましたわ（間）

エレナ・アンドレエウナ。ソヒイ！

ソーニャ。何あに？

エレナ・アンドレエウナ。何時まで貴方は私を怒つてお出なの、お互に何も惡いこともしないのに、奈何して恁う敵同士のやうに睨み合つてるの？　もう澤山ぢやありませんか………

ソーニャ。私こそ自分の方から中直りをしたいと思つてゐたの……（繼母を抱く）。もう怒らないで頂戴！

エレナ・アンドレエウナ。まあそれぢやよかつたのね。（二人とも興奮の體）

ソーニャ。お父様は、お寢み？

エレナ・アンドレエウナ。いゝえ客間にまだ起きてお出よ……ほんとうに私等をもう三四週も、お互に話らしい、話をしませんでした、何の譯で……（開放してある茶簞笥をふと見遣り）これは奈何したの？

ソーニャ。今ねミハイル・リウォーヰチ様がお夕飯を召上つたの。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

エレナ・アンドレエウナ。葡萄酒がありますの……あつたら頂戴な、友達になつた證(しるし)に一杯飲みませうよ。

ソーニヤ。あゝそれが可いわ。

エレナ・アンドレエウナ。一つの杯で飲む方がいゝのよ。（注ぐ）。其の方が可いのね、ぢやこれからはお前と呼びますからね。

ソーニヤ。えゝどうぞ。（杯を飲み干して繼母に接吻する）私ねえ、もう前から中直りを致したいと思つてたの、だけれど、何だか耻かしかつたんですもの……（泣く）。

エレナ・アンドレエウナ。おや厭なねえ、何を泣くの？

ソーニヤ。何でもないの、何だか、でも私。

エレナ・アンドレエウナ。もう可いわ、可いわ　（泣く）變な人ね、お蔭で私まで貰ひ泣きをした……（間）。お前は私がお前のお父様の所へ嫁たのは、何か利益の爲にだと思つて、それでお前は怒つてゐたのでせう、だけれど私誓つても可いの、もしお前が信じてくれるなら、私ほんとに利益の爲ぢやないのよ、愛の爲に此家へ嫁たの。私はお父様の學者で、名高い方であつたのに、心を奪はれて、此所へ來たいと思つたの、さうしてこれは本統の愛であると信じてゐたの、然し今になつて見れば、これは眞正の愛ぢやなかつたと解つたの、だけれどこりや私の罪ぢやないのよ。で、お前は私達が結婚の其の日から、その疑を帶びた敏捷な眼色で、私を始終睨んでゐたの、ねえ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ソーニヤ。もう後生だから許して頂戴。忘れて頂戴。

エレナ・アンドレエウナ。だけれどね、もう那麼風に人を見るものぢやないのよ。お前にも似合はないぢやありませんか、寧そ誰でも信じる方が可いよ、てなければ世の中に立つのはなか〳〵難かしいわね(間)。

ソーニヤ。よう、ねえお母様、私に本統をお聴かせ下さいな、貴方お仕合せな方?

エレナ・アンドレエウナ。いゝえ。

ソーニヤ。ぢあね、もう一つ聞きたいのよ、よくつて、本統を打明けて頂戴ね、お母様はもつと若い良人をお有ちになりたいてせう?

エレナ・アンドレエウナ。何と云ふお前は赤さんなのでせう。そりや欲しくないこともないわねえ(笑ふ)。て、まだ何を聞きたいの、何でもお聞きなさい遠慮なく……

ソーニヤ。貴方あの醫學士はお氣に入り遊ばして?

エレナ・アンドレエウナ。えゝ大變氣に入りましたわ。

ソーニヤ。私器量が惡いんですもの……さうだわねえ? もう彼の方は歸つて了つたんですけど私にはまだあの聲が耳に殘つてゐるの、何だか足音も聞えるやうなの、變ねえ、暗い窓の方を見れば、彼の方の顔が寫るやうに見えるの。私貴方に眞心を打明けたいんだけれど、何だか大きい聲で云ふのも耻かしくて。私の室に行きませうか、私馬鹿のやうに見えるてせう、よう、何か彼の方の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

話をして頂戴な…………

エレナ・アンドレエウナ。甚麼ことを？

ソーニャ。彼の方は思慮の深い方でせうか……何でもお出來なさる……治療にかけても、山林事業にかけても…………

エレナ・アンドレエウナ。さうね、彼の方は單に山林事業や、醫術にかけて上手と云ふよりは寧ろ天才ですよ！　解るの、奈何云ふのを天才と云ふか、詰り、勇ましい、自由な、遠大な思慮を有つてゐるものです……まづまあ彼の方なんぞは恁うです、一本の小さい木を植えて、これが千年の後には人に如何程に利益を齎らすと云ふことを、前以て見てゐるのです、這麼人々は少いです、這麼人を愛さんのは嘘ですよ……そりや彼の方は時々酒を飲みます、さうして氣が荒くなることもありますけれども那樣ことは何でもありませんさ。器量のある方は、この露西亜ではとてもさう純潔にしてはゐられないんです。まあよく考へて御覽、彼の人の實生活の狀態を！　あゝ云ふ通ることも出來ないやうな道路（みち）や、嚴寒と、吹雪と、周圍は限りもない、左にも右にも遠い〳〵距離の開けない野蠻な人間ばかりの、何所（どこ）を見ても眼に入るものは、たゞもう貧困と、疾病とでせう、那樣（そんな）周圍に圍まれてゐて、さうして此の中で激しい勞働と、奮鬪とを續けてゐるものゝ爲には、まづ四十歳になるまでなんて、なか〳〵さう潔白と、節制とを守ると云ふことは出來ないことですわ……（ソーニャを接吻する）私は心からお前の幸福を望みます、お前はこの幸福に私ほんとうに當

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るものと思ひます……（立上つて）。あゝ私なんぞはよく詰らない小説にあるやうな、意味のない退屈な人物なの……ソーニャ全くよ、音樂にても、家庭にても、夫にても是迄の歴史についても、一言で云へば全然意味のない、ほんとうに詰らん小説に描かれてゐる人物よ、實を云ふとソーニャ私は不幸なものですわ！（彼女は興奮して歩き出す）、あゝ何にも、何にも私には世の中の幸福は……無いの、何にも無いの……何を笑つてゐるの？

ソーニャ。（微笑みて顔を掩ふ）。私幸福だわ……本統によ！

エレナ・アンドレエウナ。何か彈きたくなつた……何か彈いて見ませうかねえ。

ソーニャ。彈いて頂戴。（繼母を抱く）。私もう眠られないわ……彈いて頂戴何かどうぞ。

エレナ・アンドレエウナ。彈きませう。だがね、お前のお父様はまだお寢みでないからお加減の悪い時は神經を刺戟すると有仰つて、音樂を厭がりなさるから、ねえ、行つて伺つて入らつしやいな、若し可いつて云つたら彈きませう、行つて聞いて見て頂戴。

ソーニャ。ぢや些と聞いて參りませう。（退場）

（庭園の近き邊で夜番は拍子木を打つ）。

エレナ・アンドレエウナ。暫く彈かなかつた、思ふさま彈かう、さうして泣かう、泣かう、私から思ふさま、馬鹿のやうに。（窓を見る）エヒームお前なの、拍子木を打つのは？

夜番。（庭から）。はい、私で！

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

エレナ・アンドレエヴナ。敲かない方が可いよ、檀那様が今夜はお加減がお悪いからね。

夜番。はい、只今彼方へ参ります！（口笛を吹く音がする）おい／＼ジュチカ、小僧！

ジュチカ！（間）。

ソーニヤ。（登場）。いけませんつて！

幕

■未完■

チエホフ作

──瀬沼夏葉譯──

──書　詰──

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

■青鞜四月號(小説號)は去る十八日の夜、出版法第十九條違反により發賣を禁止されました。

■社員の岩野清子さんが四月の十一日に御主人と御上京なさいまして、社へも研究會の方へも御出て下さいました、それを機として田端の筑波園で集りましたが、皆様が餘り御出て下さらなかつたのが如何にも物足りなく存じました。何卒青鞜社の雜誌でなく、皆様方の雜誌だと思召して、惡い個所も、可笑しい個所もずん／＼御注意下さいまし、皆様方の御注意やら御盡力やらで青鞜も笑はれないやうな雜誌にいたしたいと存じます、猶、尾竹紅吉さんも保持研子さんも東京に御住ひになる事になりまして先頃御上京なさいました。社の方がお一人ても多く同じ土地にお住ひだと思ふと心强いやうな、嬉しい氣がいたします。

■研究會は毎週火、金の午後三時から致してをります、社員は勿論、他の方でもお一人も多くお出で下さる事を望んでをります。

■此度文藝協會で致しますズーダーマンの「故郷」の女主人公、マグダの合評をいたしてみたいと存じます。十五日迄に原稿をお送り下さいまし。十行二十字詰の事。

■青鞜社は今度本郷區駒込蓬萊町、萬年山の方へ引越すことになりました。原稿その他の物もそちらへお送り下さいまし。急な御用のみは矢張り電話を下谷の三七七六番におかけ下さいまし。

■社員小林哥津子さんのお母様が四月十三日に御死去になりました。

■編輯の方を手傳つてをりました物集さんは、お母さんがお死なりになつてから、一切の家の事をしなければならないので止むを得ず止すことになりました。

■新たに伊藤澄江さん早川八重子さんが御入社下さいました。

■青鞜六月號は。

振事劇　長谷川時雨
叔父ワーニヤ(劇曲)　瀨沼夏葉
小說　加藤みどり
米國の芝居だより　岩田由美
若葉の頃(小說)　物集和
習作の二(小說)　杉本正生
圓窓より　らいてう
一幕物(喜劇)　上田君
自由劇場評……………｛長谷川時雨｝｛岡田八千代｝
マグダ合評　同人
表紙繪　津田とし子
その他

■昨年の十一月號に戴きました長谷川時雨さんの「夢占ひ」は、此度時雨さんのなすつて被入る舞踊研究會の第二回試演用になるさうでございます。

新刊書

新釋伊勢物語　太田水穗著　博信堂發行

物言はぬ顔　小川未明著　現代文藝叢書第十編　春陽堂發行

親のない子　齋藤徝舟著

四月の雜誌

三田文學　ホト、ギス　歌舞伎
スバル　ザムボア　早稻田文學
印象　劇と詩　紅塔
新江戸　六合雜誌　俳味
藝文　詩歌　女子文壇
家庭の華　心の花　ホープ
東洋時論　層雲　みづゑ
十善寶窟　臺灣愛國婦人　アララ、ギ

六月號の研究問題

六月號にはマグダの研究をして見やうと思ひます。お讀みに成つて御感じなり何なりの原稿を十日迄に社迄御送りを願ひます

社員の方々へ

雜誌規定

○毎月一回一日發行
○定價一册金貳拾五錢 ——郵税壹錢五厘——
○原稿〆切期日は毎月十日限とす。
○前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢
(八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五拾錢(一ヶ年分)參圓
○廣告料　(一頁)拾五圓　(半頁)八圓
○廣告は總て卷尾のこと、但し申込の順序に依る。
○振替貯金(東京口座一一六〇)に拂込まれたし
○郵券代用は一錢切手に限る(但し一割増のこと)

明治四十五年四月三十日印刷納本
明治四十五年五月一日發行

禁轉載

編輯兼發行人　東京市本郷區駒込林町九番地 靑鞜社内　中野初
印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　東京本郷區駒込林町九番地　靑鞜社
(電話下谷三七七六)
振替東京口座一一六〇番

發賣所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂
電話本局(一二四 / 三二八)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

オリオン

ふところにあれば
毎日の仕事に
事務は流るゝ如し
日曜の散策に
スケッチ畫葉書の
興をやるに事缺かず

『オリオン』萬年筆 インキ留裝置 十四金ペン附　金二圓八十錢
金鍍金飾付　金三圓二十五錢
萬年筆『アテナ』インキ　金二十錢（郵税拾貳錢）

東京　大阪　京都

丸善株式會社

『黴』の姉妹篇――新刊出來

小説 足迹

徳田秋聲作

▲總洋布袖珍▲定價五拾五錢
▲『黴』と同型▲郵送料六錢

『足迹』は『黴』の姉妹篇である。『黴』を讀んだ人は、更に『足迹』に就いて『黴』の女主人公（ヒロイン）お銀の前半生を尋ねなければならぬ。可憐の少女が、肉體の發達と境遇の變轉とに伴れて移りゆく靈の姿は、幾多の波瀾を背景として、遣瀨なき人間の苦しみと、深刻なる人間生活の一面とを語つてゐる。著者が私かに自ら負ふところある作品として、之を一般文藝愛好者に薦める。

東京麹町區飯田町三丁目二十五番地　新潮社　電話番町二二二三番　振替東京一七四二番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四月一日發行 普通號 八卷 第五號

本社には取捌あり

女子文壇

●西鶴の作に表れたる女性……外島浪之助

▼牡丹……水野葉舟

▼原町の家……文學士 澤村胡夷

▼鎌倉より……磯萍水

▼はつ夏……竹久夢二

●くま大……横瀬夜雨

▼桂公爵夫人の平生……男爵夫人 福原鶴子

▼女優の情操……森律子

●自由に過る女學生の行動……菊池幽芳

若き婦人の懸賞詩歌文滿載豐富

▼破談……佐藤萬壽子

▼春や昔……今井邦子

▼曉の第一步……長曾我部菊子

▼巡禮のうた……河野隼

▼和歌……江森美子其他

●人間の體內に生きてゐる蟲……澤田順次郎

▼耳袋……猿丸太夫

▼化粧問答……藤波芙蓉

定價拾五錢 送料壹錢半

發行元 東京京橋大鋸町 女子文壇社 (振替口座一七二九)

全國到處雜誌書店取次販賣せり

文藝雜誌

ザムボア

（執筆者）

詩　蒲原有明氏
上田敏氏
與謝野寛氏
三木露風氏
川路柳虹氏
北原白秋氏

歌　與謝野晶子氏
吉井勇氏
北原白秋氏

小説　齋藤與里氏

紹介　仲田勝之助氏

五月號……敢て數の多きを望まず、裝幀に紙質にその善美を盡して、更に特色ある單行本の重さと美しさを誇らんとす。

一册金二十五錢　送費一錢五厘

近刊書

森川葵村著　夜の葉　詩集　定價六十錢　送費四錢

吉井勇著　水莊記　歌集

北原白秋著　桐の花　歌集

木下杢太郎著　和泉屋染物店　戯曲集

故石川啄木著　一握の砂以後　歌集

東京市京橋區
（京橋際）
東雲堂書店
振替口座東京五六一四

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

清新なる文藝雜誌

劇と詩

毎月一回 一日發行

定價一部 二十五錢

五月號要目

■福田夕咲氏著 詩集「春の夢」新刊發賣 定價七十五錢 郵稅六錢

マグダの上場に就て　島村抱月
毒草より　小川未明
笑と涙　福田夕咲
L'ESPRIT VEILLE　仲田勝之助
明石町の靜さんに　山村暮鳥
にがき瞳　白鳥省吾

鄕士の家（戯曲）　國枝史郎
美（詩譯）　米川正夫
ヤコブの美（戯曲）　服部塔歌
獵師村（小說）　西川まつ子
彼岸花（小說）　秋庭俊彦

餘情　佐々木好母
幻の女　長谷部鞆繪
淡き影　仲木貞一
とほ音　人見東明
提燈（繪）　齋藤與里
寺の壁（繪）　小川千甕

■小澤久雄氏著 小說集「流れ」新刊發賣 定價七十錢 郵稅六錢

發行所 小石川區雜司ケ谷町一一四 劇と詩社

發賣所 東京堂 東海堂 至誠堂 北隆堂 上田屋 良明堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

毎月一回
一日發行

北方文學

定價廿錢
郵税一錢

明治四十五年　第一號　五月一日發行

北歐の思想乃至藝術は或意味に於て我北方及裏日本の思想乃至藝術なり。「北方文學」は此見地に立つて生れ、而して我文壇に郷土藝術の旗色を明にせんとするものなり。

單調の哲理（論文）	相馬御風
白い母（ソログープ作小說）	長澤武男譯
竹の花（短歌）	松岡白虹
鹽尻峠（小說）	丸山直光
譯詩四篇（ミンスキー作）	昇曙夢譯
春の對話（脚本）	秋田雨雀
ドストエヴスキー論	瀬戸義直
虚僞（クリニーツキー作小說）	米川正夫譯
横顔（短歌）	村松密獵船
悲哀（小說）	小川未明
松山家（傳說）	うめ二
豌豆の花（ロシヤ傳說）	たけを
鹿島の堰（傳說）	弦子

その他內外民謠、ロシヤ便り、エヂトリアル●ノート等

發行所　東京市小石川高田豊川町八　北方文學社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

純文藝雜誌

モザイク

毎月一回 一日發行

定價一部 貳拾五錢

五月創刊號要目 一日發行

ヹール・ラ・テール・キ・ムートル……藤井伯民
ガンギの下……水島爾保布
ドクトルの手（レンスキー）……山田豐彦
影のMODULER……川路柳虹
汽車の窓から……五十嵐禎夫
乙女椿……廣川菽泉
門まで……西田廻瀾
人込の中へ……山本露葉
青い家から……山本露葉
表紙繪……水島爾保布
裏繪第十のミューズ……川路柳虹

發行所 東京市本郷區東片町四十七番地 鼎堂書店

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

月刊藝文雜誌

明治四十五年五月號　五月一日發行

定價一部郵稅共廿二錢、半年分一圓廿錢、一年分二圓卅錢

「藝文」は京都帝國大學内京都文學會の機關雜誌にして東西兩洋の學術文藝に對し最も謹嚴深刻の批判を下さむとするものなり

新體詩の押韻法に就いて　理學博士　近重眞澄
敦煌本大雲經と賢愚經　文學博士　松本文三郎
慈恩會　文學博士　藤代素人
最古の個人エヘン、アートン　文學博士　坂口
タールドとベルグソン　米田庄太郎
簡牘檢署考　王國維
支那に於て發達したる樂論　文學士　兼常清佐
職業の尊卑を論ず　文學士　高田保馬
小古の「女」　文學士　植田壽藏
再び唐寫本唐韻につきて　岡井愼吾
更に西城記校訂委員に寄す　ドクトル　萩原雲來
三度萩原來氏に答ふ　新刊西城記校訂委員

發行所　鷄聲堂
東京小石川原町六　振替東京一三五三　電話番町二六〇八

みづゑは本邦最古にして又唯一の水彩畫研究專門雜誌なり

月刊 みづゑ 美術雜誌

水彩畫を描く人は勿論愛好せらるゝ諸君は座右に本誌を缺くべからず

毎月一回三日發行　金二十五錢　一部郵稅共

第八十七號　五月三日發行

口繪

山形風俗（水彩原色版）　中澤弘光
綠色の流（同）　赤城泰舒
糸滿の刳舟（同）　吉田博
飯坂（同）　故大下藤次郎

記事（主要なるもの）

裝飾美術に就いて　識田一磨
ターナーの水彩畫　南薰造
繪畫美學（二）　服部嘉香
萬世不易と一時流行　中村不折
白樺と綠の流　赤城泰舒
記憶に殘る水彩畫　三宅克己
私に畫が描けたら　磯萍水
續三脚物語（三）　鵜澤四丁
春十題　織田一磨
頰杖小言　水野以文
課題數種
其他寫眞版—木版—評論—寄書

發行所　東京小石川區關口駒井町三　振替貯金口座東京六九六三番　春鳥會　大下春子方

心の花

第十六巻　五月號　第五號

眠（チエホフ）　呉野湖音
乞食（ローゼン、ベルゲル）　天沼匏村
少きアイヨルフ（イプセン）　草野柴二
民謡と花　秋元蘆風
竹柏會大會の記　岡部千代子
舊思想と新思想　上田敏
心の園　佐佐木信綱
小草の香　三浦守治
魔のすむ宮　氏家信
あきらめ　神山源之
花ふる里　石榑千亦

定價一部金十二錢郵税一錢●半年前金七十五錢

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部
振替東京四三〇〇番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

五月一日發行

アララギ

第五卷 第五號

短歌漫言　柿乃村人

イェーツの詩　山宮允

白きもの二つ　土屋文明

象徴主義の話　阿部次郎

愛蘭物語三種　山宮允

礎山君（月旦）　伊藤左千夫

短歌

齋藤茂吉
柿乃村人
蕨眞
中村憲吉
古泉千樫
不二女
閑古女
夜汐女
蕨桐軒
土屋文明

一冊拾五錢●半年八十五錢●一年一圓六十錢（税共）

東京市本所區茅場町三ノ十八　東京根岸短歌會

毎月一回一日發行
一冊二十五錢郵稅一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

第百四十三號（五月一日發行）

六冊前金郵稅共一圓五十錢
十二冊金二圓八十錢

戯曲 **戀愛三昧** …… 鷗外口譯
明治座の記 …… 山の手の女
默阿彌著作解 …… 河竹繁俊
文藝協會の「故鄉」…… 島村抱月
マグダの衣裳 …… 池田銀次郎
佛蘭近代劇の勃興 …… 和田魚平
劇壇雜感 …… 本間久男
吉右衛門の爲に …… 揚羽蝶次
文藝活動寫眞會 …… 吉山旭光
四月の脚本 …… 花びし生
僕の淸盛 …… 伊井蓉峰

脚本 **籠を出る女の萬歲** …… 川村花菱

「母と癡馬」…… 佐藤紅綠
宗十郎の「大藏卿」…… 春浦生
「母」と「八重垣姬」…… 佐久良生
「安針」と「早合點」…… 桃園主人
高田實と語る …… 鈴木春浦
「佛法前」の鳴物 …… 杵屋正三郎
「白拍子祇王」の鳴物 …… 杵屋勝四郎
「祇王」を見て …… しぐれ
藝にもいろ〳〵 …… 幸堂得知
無駄之話 …… 瀬戸陶太郎
舞踊研究會に就て …… 長谷川時雨

本鄉區湯島切通
坂町畫報社內

歌舞伎發行所

電話下谷二四八三
振替口座一八〇一六

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白樺

グスタアフ●クリムト(紹介)……小泉鐵
氣分(小説)……齋藤與里
MUUNET-SULLY！(詩)……九里四郎
題未定(感想)……柳宗悅
歸鄉錄(短歌)……柳敬助
或る若い女(小品)……武者小路實篤

挿畫
法理學
女の肖像
水蛇
少女の首
醫學
グスタアフ●クリムト

要一のまぼろし(小説)……平澤仲次
夕方に(短歌)……木下利玄
モンマルトルより(その三)……梅原良三郎
或る女のグリンプス(小説)……有島武郎
京都通信……同人
編輯室にて……同人

東京麹町區麹町二の二
洛陽堂發行
振替口座二〇九一四番

第三卷第五號
五月號
定價一册卅錢

市内一手販賣所東京市京橋區尾張町二丁目二十六東海堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

五月一日發行
第四年第五號

スバル

定價金參拾錢
郵稅貳錢

小說
不可説……森鷗外
誘惑……竹友藻風
昔馴染……五百歌左二郎
太陽の照らす牧場……出野青煙
田舍芝居……三島きぬ子
題未定……與謝野晶子
三文堂……江南文三

戲曲
黎明……灰野庄平
崖……古原若水

詩
音なき歌……茅野蕭々
葬禮……よさの、ひろし
哀感……出野青煙
一人の世界……佐々木好母
遠き國より……堀口大學

歌
白百合　よし子
琴子　大學
等

椋鳥通信　無名氏

東京神田區北神保町二
昴發行所
電話本局四二六四番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

演劇研究雜誌

本號限
特價
金卅錢

シバヰ

毎月一回
一日發行

五月號

未來の劇場美術家　河野讓
未練（戯曲）　清見陸郎
馭者ヘンシエル　ハウプトマン
墮地獄（戯曲）　中谷德太郎
女優と女　楠山正雄

舞臺と科學と天然　木場町生
ジョルジエット・ルブラン　陶四郎
マグダ　ヒュンカア
翠扇姉妹へ　しぐれ
箱根日記　秋田雨雀
弟子（小品）　虎太郎

歐米劇壇消息
新作舞臺面解說
海外新潮
其他

挿繪

ゴオヅン・クレエグ意匠舞臺裝飾―イレエネ・トリイシュのマグダ―ガルスヷアシイ作「鳩」及肖像―トルストイ作「生ける屍」―シュニツツレル作「遊い圖」及肖像―ハウプトマン作「シラキニースの乞食」及肖像―ショウ作「フアンニイの處女作」等

東京市牛込區東五軒町三十七番地
シバヰ發行所

（本號は四月五月を合せて一卷とす）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

毎月一回一日發行
五月一日發行

大阪出版
短檠

定價十五錢
送料一錢
一ケ年一圓八十錢

五月第三號

闇の路（詩、オツト・ボルン）　伊達俊光譯
畫家オスカー●ツピンシエル（紹介）　伊達俊光
暮れゆく春外三篇（詩）　國技史郎
春紅（小説）　花岡桃崖
夜（小品）　百田楓花
BAISEA（詩）　鶴丸梅太郎
幕あひ（歌）　廣川菽泉

繪
表紙（木版）　鍋井克之
扉（木版）　久世勇三
闇の中の路（寫眞版）　オスカー●ツピンシエル
河庄（木版手刷三度）　久世勇三
裏繪（木版）　永瀬漁郎

思ひざめ（小說）　矢澤孝子
アトリエの卓上（詩）　鍋井克之
春くれば（歌）　高野はる子
復活祭（ストリンドベルグ、戲曲）　秋山愁人譯
版畫（詩）　川路柳虹
邪宗門聖歌（詩、オマル・カイヤム）　増野三良
温室　同人

發行所　大阪市東區内久寶寺町二丁目十八番地　短檠社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

○附錄刺繡下圖寫眞挾の圖（石版印刷）○

五月號

新女學

■東伏見宮妃周子殿下の御高德……駿東女史

●男子も及ばぬ健氣なる支那婦人……犬養毅

■我子に嫁を娶るなら……三輪田眞佐子

●食物の話……後藤博士

●七轉び八起（惟精會會長）……龜井櫻悟

（口繪）

●橫顏……藤嶋武二　三色版

●作圖法の要領……木村淡香　石版口繪

●あぢさゐ（表紙）……杉浦非水　石版彩色

寫眞版

◎九條公爵夫人惠子の方◎活花の挿花◎牡丹の刺繡額面◎佛光寺裏方蓬子の方◎間々田たま子孃◎松の門三艸子女史（八十一歲）◎原安民氏の食堂と臺所◎其他十數種入

▲動物の結核と牛乳……佐藤愛羊

◎筍の話……大木學士◎茶の話……山田學士

▲今の裝飾と昔の裝飾……梶田半古

◎新式七曜表のおさいく……杉山みち子

▲入梅前の衣服と家具の仕末……井上秀子

◎春持手提袋の編み方……山田さめ子

▲鬱憂なる良人を持てる妻の心得……高津正嗣

◎端午の御料理のいろいろ……金風樓主人　●ダリヤ栽培法……千葉晚冬

◎家庭と盆栽……廣田花崖　◎牛蒡と顏……木村淡香

◎食堂と臺所……原ちよ子　◎家庭漫錄……寄村樽

◎私の入學當時……美波子　◎俗諺と大和民族……戸川殘花

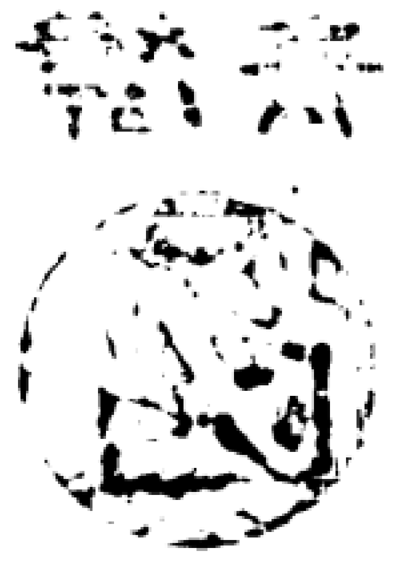
◎卒業後（小說）……加藤筆子　◎數談松の門三艸子……野口俊堂

一冊二十八錢　郵二錢五厘

●半ヶ年前金一圓六十八錢郵稅共

●一ヶ年前金三圓二十四錢郵稅共

東京日本橋　大倉書店（振替東京二三八）



昭和43年9月15日発行　【第2回配本】

青鞜 第2巻（第1分冊）

編著者　平塚らいてう
発行者　藤原正人
発行所　(株)明治文献
印刷　江明印刷
製本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 3,800円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
V.2
no.5

University of Colorado at Boulder

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER